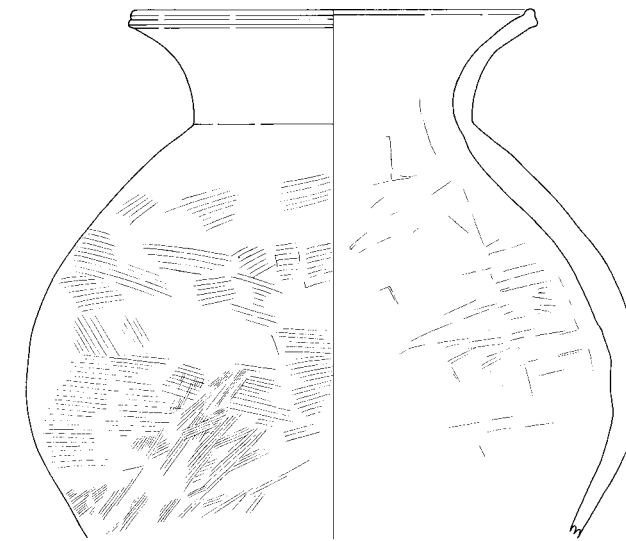


石川県 金沢市

直江ボンノシロ遺跡Ⅲ

-金沢市立鞍月小学校体育館建設・地下貯留施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成29年3月

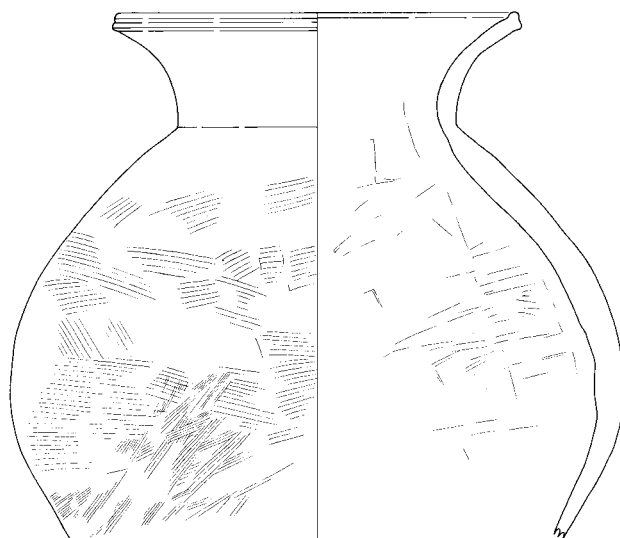
(2017年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県金沢市

直江ボンノシロ遺跡Ⅲ

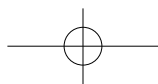
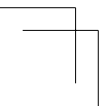
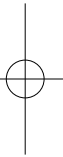
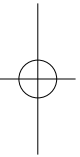
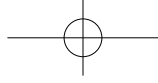
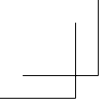
-金沢市立鞍月小学校体育館建設・地下貯留施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成29年3月

(2017年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)



例 言

1. 本書は、石川県金沢市副都心北部直江土地地区画整理事業 92 街区 1 番地内に所在する直江ボンシロ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 直江ボンシロ遺跡は、金沢市教育委員会教育総務課による鞍月小学校体育館建設工事および土木局内水整備課による鞍月小学校地下貯留施設建設工事に伴い、平成 26 年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間と場所、面積は次のとおりである。
平成26年5月19日～7月2日(調査面積1,188 m²)
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会(委員長 谷内尾晋司氏、委員 横山方子氏、小嶋芳孝氏、米澤義光氏)の指導の下で、新出敬子(文化財保護課主査)が担当した。
5. 本書の編集・執筆は、新出敬子が担当した。写真撮影は庄田知充(文化財保護課主査)が担当した。
6. 本報告書は直江ボンシロ遺跡の発掘調査報告書の第3冊目であることから、直江ボンシロ遺跡Ⅲとした。平成22年度に刊行した2冊の直江ボンシロ遺跡発掘調査報告書のうち、金沢市文化財紀要278を第2冊目とする。
7. 本書に収録した遺物は、全て金沢市教育委員会が一括保管している。
8. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた(50音順)。
井川明子氏、蟹ヤエ子氏、谷森真利氏、寺西悦子氏、土橋裕美氏、供田奈津子氏、畑尾ゆか氏
9. 本書の遺構図の指示は以下のとおりである。
(1)遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第Ⅶ系(測地成果2011)に準拠し、真北からは1分、磁北からは7度40分東偏する。
(2)各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
(3)遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル(m)で記した。
(4)遺構名は、SA:柵列、SD:溝、SK:土坑、SH:平地式建物、SP:小穴・柱穴、SX:その他の遺構などの略号を用いた。
10. 土層の色調は小山正忠・竹原秀雄2006『新版標準土色帖』(日本色研究事業株)による。

目 次

第1章	遺跡周辺の位置と環境	1
第2章	調査に至る経緯と経過	3
第3章	調査の概要	7
第4章	総括	25
	写真図版	
	報告書抄録	

凡 例

遺物について

1. 遺物図の縮尺は、次のとおりである。図版にはスケールを付し、表題末にも示している。
 - 1/2 石製品の一部、土人形
 - 1/3 陶磁器、土器、石製品の一部
 - 1/4 木製品
2. 遺物図中、須恵器は、断面図を黒塗りし、内面黒色土器は内面に目の粗いスクリーンを貼ってある。
3. 遺物図中、陶磁器類の釉調を次のとおりスクリーン等で区別している。
(青磁釉: 目の細かいスクリーン、白泥: 黒塗り)
4. 遺物図中、漆器における色の表現は、黒漆は目の粗いスクリーン、赤漆は目の細かいスクリーンで区別している。
5. 遺物図中、木製品のコゲについては黒塗りをしてある。

遺物観察表について

1. 「番号」欄には、図版ごとに振り直した番号をつけている。
2. 「器種」欄には、土器・須恵器などの材質も併記している。
3. 「法量」は、a・b・c・dの4欄に分けて記入した。計測部位は凡例図のとおりである。口径は最大径、底径は接地部径である。計測値のうち()数字については現存長を示すのに用いた。
4. 「遺存」欄には、径を復元する際に利用した部位と12分割した際の遺存度を示した。底6は底部6/12で半分、口12は口縁部12/12で口縁部が全て残っているということである。完形は少しの欠けもないということである。
5. 「胎土」に含まれる礫・砂・骨(海綿骨針)を多、並、少で表した。
6. 「焼成」(焼と記載)については良、並、不で表した。
7. 「実測番号」欄は、実測者の通し番号で、遺物・実測図に付している番号と一致する。

第1章 報告の経緯

第1節 調査に至る経緯

直江ボンノシロ遺跡は金沢市立鞍月小学校体育館建設及び同小学校地下貯留施設建設に伴い発掘調査を行った遺跡である。当該遺跡を含む直江遺跡群は、金沢市が金沢市副都心北部直江土地区画整理事業地内を平成19年度から平成22年までの4カ年にわたって発掘しており、直江北遺跡、直江中遺跡、直江南遺跡、直江ボンノシロ遺跡、直江ニシヤ遺跡、直江西遺跡からなる。調査面積は23,768㎡に及ぶ。これまでに4冊の報告書を刊行しており、今回で第5冊目となる。

遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの経緯は以下のとおりである。

平成19年10月15日～16日にかけて金沢市副都心北部直江土地区画整理事業地内の埋蔵文化財試掘調査が行われ直江ボンノシロ遺跡がみつかった。翌年、さらに試掘を行い各遺跡の範囲が確定した。直江ボンノシロ遺跡の範囲内で金沢市立鞍月小学校体育館建設と地下貯留施設建設が行われるということで、平成25年10月金沢市埋蔵文化財センターと金沢市教育委員会教育総務課、金沢市土木局内水整備課で発掘調査と工事の調整協議を行った。その結果、平成26年度8月の体育館建設工事までに発掘調査を終了させるということになり、平成26年5月19日～同年7月2日にかけて1,188㎡の発掘調査を実施した。

表1 直江遺跡群における発掘調査と報告書刊行の経緯

年次	遺跡名	発掘期間	原因	面積	担当者	報告書
平成19年度 (2007年)	直江北遺跡	2007.7.12～2007.12.6	区画整理	9,500㎡	谷口(宗) 向井・新出	H26.3刊行
平成20年度 (2008年)	直江北遺跡	2008.9.16～2008.12.19	区画整理	3,170㎡	向井 新出	H26.3刊行
	直江中遺跡	2008.7.30～2008.12.8		2,830㎡		H23.3刊行
平成21年度 (2009年)	直江北遺跡	2009.7.28～2009.12.9 2010.3.8～2010.3.17	区画整理	1,300㎡	前田 向井	H26.3刊行
	直江中遺跡	2009.10.26～2009.12.9		1,680㎡		H23.3刊行
	直江南遺跡	2009.7.7～2009.12.9		200㎡	向井	H24.3刊行
	直江ボンノシロ遺跡	2009.7.13～2009.12.9		450㎡		
	直江ニシヤ遺跡	2009.7.14～2009.12.9		700㎡		
	直江西遺跡	2009.7.14～2009.12.9		300㎡		
平成22年度 (2010年)	直江北遺跡	2010.7.20～2010.10.18	区画整理	1,550㎡	向井	H26.3刊行
	直江ボンノシロ遺跡	2010.10.12～2010.11.26				公民館建設
		2010.11.29～2010.12.24				
平成26年度 (2014年)	直江ボンノシロ遺跡	2014.5.19～2014.7.2	体育館建設 地下貯留施設建設	1188㎡	新出	本書

(刊行済の報告書)

『直江中遺跡 金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』	金沢市文化財紀要266 金沢市 2011年
『直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡 金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』	金沢市文化財紀要277 金沢市 2012年
『直江ボンノシロ遺跡-鞍月文化会館くから建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』	金沢市文化財紀要278 金沢市 2012年
『直江北遺跡-金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-』	金沢市文化財紀要294 金沢市 2014年

【発掘日誌抄】

平成26年(2014年)

5月19日 表土掘削開始(5/24まで)

6月2日 現地調査開始

6月3日 遺構検出(6/4まで)

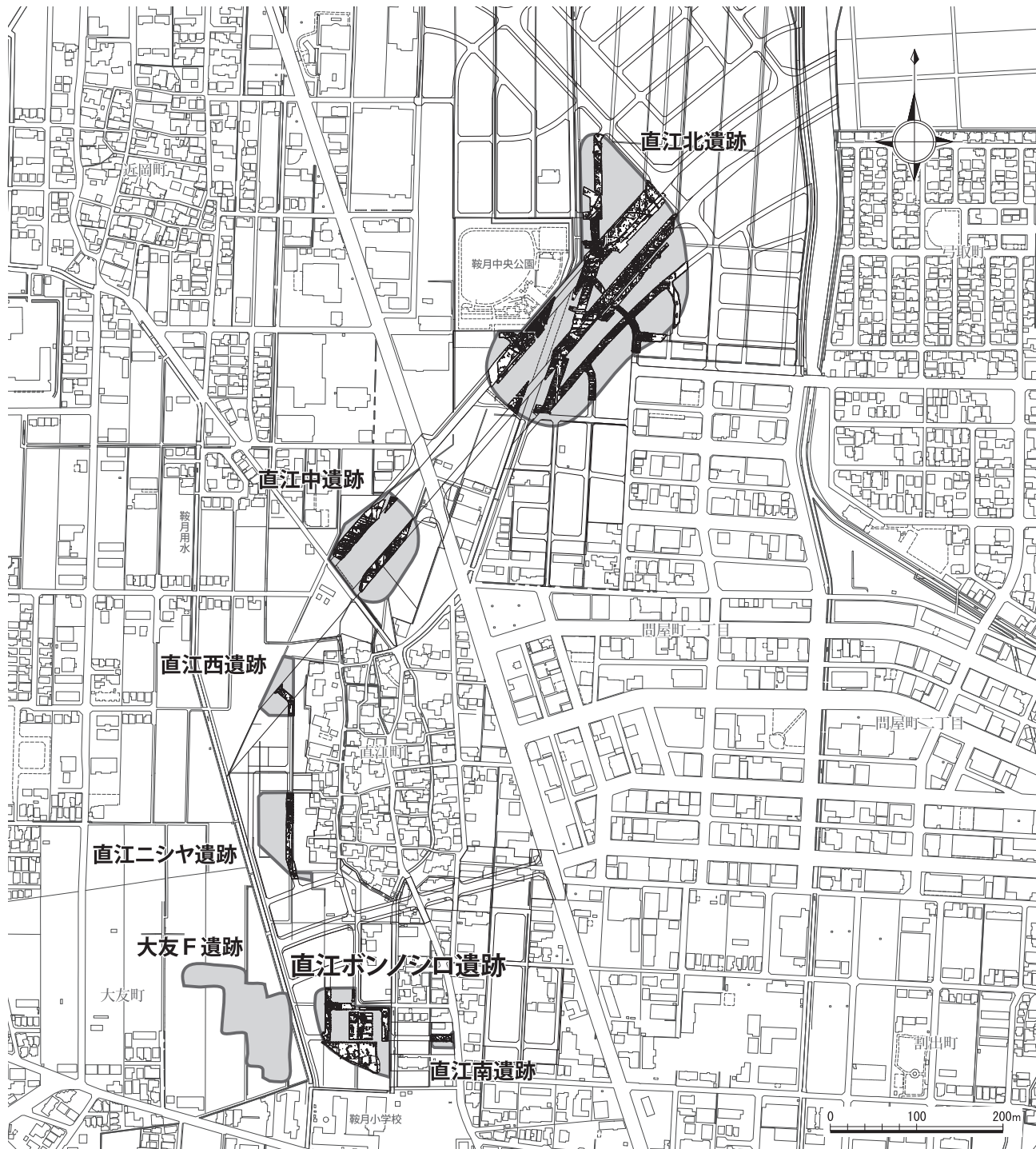
6月4日 1/100平面図作成

6月4日 各遺構掘削(6/26まで)

6月30日 航空測量のため遺構精査

7月1日 航空測量実施

7月2日 撤収等、現地調査終了



第1図 直江遺跡群と周辺の遺跡 (S=1/7,000)

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

石川県は南北に細長い県で、能登と加賀の地域から成り立っている。北と西は日本海に面し、東は富山県、南西は福井県、南東は岐阜県と接している。

金沢市は石川県の中央部に位置し、東は富山県小矢部市・南砺市に接し、西は日本海、南は石川県白山市、石川県野々市市、北は河北郡内灘町・津幡町に接する。地形は犀川源流域にある標高1,644mの奈良岳や富山県と接する標高939mの医王山などの山地から、丘陵部を経て金沢平野の北部に広がり日本海に面している。また、市の北部には、かつて石川県最大の面積であった河北潟がある。(現在では、2/3が干拓され農地となっている。)

金沢平野は犀川を境として北部平野と南部平野に分けられる。北部平野は犀川、浅野川などによって形成された沖積平野で、一般に低湿で傾斜が緩やかであるため、古くから自噴地下水が各地で見られる地域となっている。一方、南部平野は手取川の扇状地北東端部にあたり起伏の多い地形となっている。

今回報告する直江北遺跡は北部平野の北西部にあり、海岸線から南東に約3km、大野川から南に約1km、浅野川から西に約800mの場所に位置する。土壌は湧水があり粘性が強い。遺跡周辺はかつて所々に地下水が自噴する環境に恵まれた地域で古くから集落形成に適しており、市内でも有数の遺跡密集地帯となっている。

第2節 歴史的環境

縄文時代 晩期の遺跡には直江北遺跡の川跡から遺物がまとまって出土している。直江中遺跡、直江ボンノシロ遺跡でも晩期の遺物が確認されている。

弥生時代 前期の遺跡数は少ないが、戸水C遺跡や南新保三枚田遺跡から土器が確認された。中期の遺跡としては直江北遺跡で土坑や溝から土器が出土している。直江ボンノシロ遺跡や直江西遺跡では川跡から遺物がまとまって出土している。大友E遺跡からも川跡から遺物がみついている。平地式建物が検出された寺中B遺跡、戸水B遺跡のほか畝田遺跡がある。畝田西遺跡群では中期後半の土坑や井戸が広範囲でみつかった。また、西部地区の拠点集落ともいえる西念・南新保遺跡では竪穴建物や掘立柱建物、土坑墓などが検出され、古墳時代初頭まで継続する。後期の遺跡としては直江北遺跡で溝の最深部から遺物がみついている。周溝を持つ平地式建物がみつかった桂町南遺跡、後期～古墳時代初頭にかけての多数の掘立柱建物や竪穴建物がみつかった大友西遺跡と戸水ホコダ遺跡がある。終末期に入ると遺跡の数は増加する。代表的な遺跡は、双頭龍文鏡と銅鏃が出土した無量寺B遺跡、終末期～古墳時代にかけての大溝から多くの土器や木製品とともに弧文板と玉杖形木製品が出土した畝田遺跡、南新保D遺跡などがある。直江北遺跡、直江ボンノシロ遺跡や直江西遺跡でも弥生時代終末～古墳時代にかけての遺構や遺物が確認されている。

古墳時代 古墳時代初頭の遺跡では直江北遺跡でも遺物が出土しているほか、玉造関連と考えられる集落がみつかった大友F遺跡がある。直江北遺跡や直江ボンノシロ遺跡、大友E遺跡では前期～中期にかけての集落跡が確認されている。直江西遺跡では前期の土坑、直江ニシヤ遺跡では中期の遺物が出土している。畝田西遺跡群では溝で区画された複数の遺構群で構成される集落が検出された。戸水C遺跡ではこれ

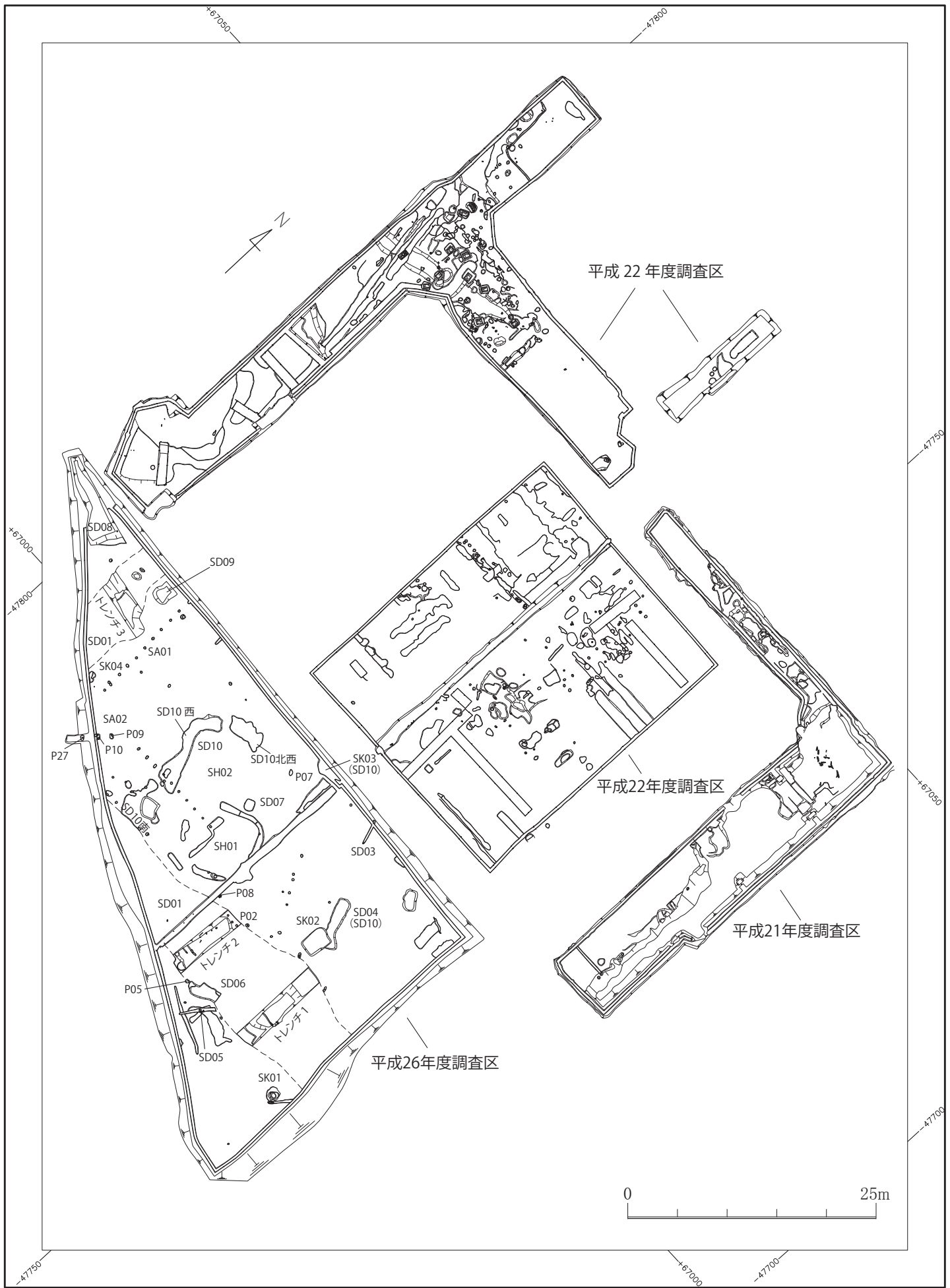
までに前方後方墳や方墳が30基もみつき、今はほぼ消滅した金沢平野の古墳を考える上で重要な発見といえる。大友西遺跡からは削り貫き円盤が出土しており、玉造に関係した遺跡と推測される。中後期にかけては畝田西遺跡群がある。竪穴系建物や掘立柱建物群と倉庫や井戸、区画溝などが検出され、大量の土器、木製品などが出土した。西部地区における古墳時代中後期の中心的な集落といえる。

奈良・平安時代 8世紀代の直江北遺跡周辺は越前国加賀郡に属していた。海岸部の金石本町遺跡からは3×9間の大型建物や木簡、墨書土器が出土し、畝田・寺中遺跡では倉庫と考えられる建物群や川跡から袋文字の「人」をはじめとして「津」の墨書土器が大量に出土するなど、官衙的な港湾施設が想定される。9世紀に入り加賀国が立国すると官衙的な港湾施設が想定される戸水C遺跡をはじめ「宿家」の墨書土器が出土した戸水大西遺跡、「伯庄」「庄」などの墨書土器が出土した大友西遺跡など荘園関連と考えられる遺跡が増加する。直江北遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江西遺跡・直江ニシヤ遺跡からも遺物がみつまっている。大友E遺跡からは総柱建物跡がみつかったほか、川跡から大量の墨書土器（「井」、「依」、「大」など）が出土し、石帯や皇朝銭も出土していることから、公的な施設があったと考えられている。畝田ナベタ遺跡からは渤海との関係が窺われる帯金具が出土している。

中世 中世では海岸部の普正寺遺跡があげられる。五輪塔や柿経、貿易陶磁が出土し、港湾施設が存在したと考えられる。畝田西遺跡群や畝田・寺中遺跡からは条里溝とその区画内に多数の掘立柱建物や井戸が検出され注目を集めている。直江北遺跡からは建物跡や烏帽子が出土した。直江南遺跡では13世紀前半～14世紀前半頃の井戸や竪穴遺構がみつまっている。直江ボンノシロ遺跡の名前の由来となっている小字名のボンノシロであるが、香川県櫃石島にボンノシロ（望の城）という地名が残っているということである。伝承ではその場所に城砦があったと言われているが、遺跡は確認されていない。直江ボンノシロ遺跡においても城館に関する遺構は確認できず、川跡から遺物が少量出土したのみであった。直江ニシヤ遺跡では鎌倉時代の井戸がみつまっている。直江西遺跡では鎌倉時代から南北朝時代頃の掘立柱建物、井戸、土坑、川などがみつまっている。大友E遺跡では総柱建物跡と井戸がみつかり、烏帽子も出土した。

〈参考文献〉

- 『金沢市史 資料編 19 考古』1999 金沢市
『直江中遺跡』2011 金沢市埋蔵文化財センター
『直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』2012 金沢市埋蔵文化財センター
『桂遺跡』『石川県立埋蔵文化財センター年報 第5号』1985 石川県立埋蔵文化財センター
『金沢市寺中B遺跡』1991 石川県立埋蔵文化財センター
『畝田遺跡』1991 石川県立埋蔵文化財センター
『金沢市戸水B遺跡』1994 石川県立埋蔵文化財センター
『戸水C遺跡・戸水古墳群(第9次・10次)』2000 石川県立埋蔵文化財センター
『金沢市畝田西遺跡群Ⅲ』2006 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
『金沢市畝田西遺跡群Ⅳ』2006 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
『金沢市畝田西遺跡群Ⅴ』2006 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ 大浦浜遺跡 本文編』1988 香川県教育委員会 本州四国連絡橋公団



第3図 直江ボンノシロ遺跡の調査年度と調査区配置図 (S=1/500)

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

本書では各遺構の詳細については第2～5表の遺構観察表にまとめてあるので、ご参照いただきたい。ここでは遺物が出土した遺構、建物を構成する遺構等を取り上げて記載してある。また、遺物についての詳細な記述に関しても第6～9表の遺物観察表に記載してあるのでご参照願いたい。SK03、SD04、SD06、SD10に関しては調査当初、別遺構として取り扱ったが、調査中に同一遺構であることがわかり、SD10とした。

第2節 主要遺構と出土遺物について

1 建物

SH01(SD07)(第 3・4・6・9 図) 調査区中央でみつかったSD07で方形区画を構成する建物跡か。北側は残りが良好であったがそれ以外は削平を受けていた。第9図18の弥生時代と考えられる口縁にキザミを施した甕であるが、胎土がもろく弥生前期の様相を呈する。19の口縁部がくの字状に屈曲する古墳時代に属する甕が出土している。その他、土師器の細片が多数出土した。

SH02(SD10)(第 3・4・7 図) SD10は調査区中央でみつかった平地式建物SH02の周溝と考えられる。当初、SK03、SD04、SD06、SD10と別々に取り扱っていたが、埋土や出土遺物の様相から同一の溝と考えられる。直径約26mを計る。出土遺物は第12図13～19、第13図1～4で弥生時代終末期に属すると考えられる。また、第13図20の砥石や21の磨製石斧も出土した。SD10のうち当初SK03とした遺構から出土した遺物は第12図 11・12である。11は有段擬凹線の甕で口縁部は直立し外側へ開く。12は台付壺の脚部であろうか。底部はハの字状に開く。第13図20の砥石が出土している。全面が砥面となっている。また、SD10のうち当初SD04とした遺構から出土した遺物は第12図13～16である。13は壺か甕の底部で外面に煤が認められる。14は有段口縁の甕で口縁部が直立し外側へ開く。15・16は有段擬凹線の甕で口縁部は直立するが端部がやや外側する。第12図17はSD10のうち当初SD06とした遺構から出土した甕で有段擬凹線の口縁部形態で直立し外側へ開いている。第12図 18・19 はSD10の西側部分で出土した遺物で、18は有段擬凹線の甕で口縁部は直立し端部が外反するタイプのものである。19は高杯であるが杯部の下部分の形態は不明である。口縁部はラッパ状に大きく外側へ開く。第13図1～3と21はSD10の南側部分から出土した土器と石器で、1は有段擬凹線の甕で端部は直立しやや外側へ開く。内面には指頭圧痕が認められる。2は甕等の底部、3は外面に縦方向のハケと思われる調整があり、内面は胎土の小石が露出し摩滅が激しい。縄文晩期末か弥生時代前半の土器か不明である。21は磨製石斧である。刃部は折れた後、磨り石として使用したかのようになめらかになっている。

2 柵列・土坑

SA01 (P15～P24: 第 3・4 図) 調査区中央西寄りで検出した柵列で南北方向に延びる。近代のハサ穴の可能性もある。P16から時期不明の土師器片が2点出土したが、その他の穴からは出土していない。

SA02 (P09、P10、P27: 第 3・4・8・14 図) 調査区中央西寄りの南壁にかかる位置で検出した柵列である。いずれの穴からも礎板(第14図2～5)と考えられる木製品が残存していた。P27より南には穴は確認できなかったので3つの穴で構成される柵であることが判明した。P09より第8図2が出土した。細片なので時期は不明であるが、古墳時代のものか。その他、P10およびP27からも土師器細片が複数出土している。

P07(第 3・8 図) 調査区中央北寄りで検出された穴で、かなり削平を受けて浅くなっていた。第8図1の有段無文の甕が穴の底の地山に刺さる状態で出土した。古墳時代前半のものか。

P08(第3・8図) 調査区中央で検出されたが、穴ではなく、P08とした範囲に縄文晩期の土器が捨てられたような状態で検出された。地山の表面に縄文土器がへばりついたような状態である。当調査区では他にはこのような状態で縄文土器は検出されていないが平成22年度調査では地山に汚れた土が混ざったような遺構としてのプランを持たない場所から縄文晩期の土器がまとまって出土していると報告されており、地山形成時に混入したものと推測されている。第8図5が該当する縄文深鉢で外面は横方向の条痕が巡る。

P11(第3・8図) 弥生時代終末期の平地式建物の周溝と考えられるSD10の上に掘られた穴である。出土遺物は第8図3の古墳時代前期の小型器台等の脚部が出土した。

P26(第3・8図) 第8図4の土師器甕が出土したが細片のため詳細は不明である。

3 土坑

SK01(第3・4図) 調査区東端で検出した土坑で、2層からなる。下の土層はほぼ地山に近い土である。土師器細片が2点と炭が1点出土した。

SK02(第3・8図) 近代のカクランである。第8図6は越前産陶器すり鉢か。この他、近世肥前陶器刷毛目碗片、近世土師器片、近代陶磁器片等様々な出土物がある。

SK04(第3・4・8図) 調査区西よりの南壁にかかる位置で検出した。近世から近代まで続くと考えられるSD01によって壊されている。第8図8～10の古墳時代初頭の壺や甕が出土した。

4 溝・川跡・その他

SD01(第3・5・8・9図) 調査区東西を流れ、おそらく北に直角に曲がる古代から近代に続く川跡である。出土遺物はトレンチ1からは第8図11の17世紀後半代の肥前産磁器皿で見込みが蛇目釉剥ぎになっているもの、12～14の産地不明の磁器で銅板転写を施した製品や15の施釉土器の乗燭、16のガラス製瓶といった近代の製品、17～21の須恵器、22は肥前産陶器の刷毛目碗で17世紀末～18世紀前半代のものである。23は九谷産陶器の鉄絵の碗である。高台の内側の削りが深くなっている。24・25は肥前産陶器の皿で見込みに砂目跡が残る。17世紀中頃のもののか。26は肥前産陶器鉢で刷毛目を施すものであろう。見込みには砂目が残る。27は須佐産陶器すり鉢である。時期は不明である。その他、珠洲焼の甕やすり鉢片、越前焼の甕の細片等が出土した。トレンチ2では第9図1の古代の土師器有台碗、2の産地不明の陶器碗、3の18世紀代中頃の肥前産磁器皿や4の見込みに蛇目釉剥ぎとコンニャク印判の五弁花がみられる18世紀中頃の肥前産磁器皿、5の肥前産陶器の鉢、6の産地不明の鉄泥を施した陶器製の灯明皿、7の火鉢、等が出土した。トレンチ3からは8の須恵器有台坏、9・10の時期・器種ともに不明の土師器、11の見込みが蛇目釉剥ぎされている肥前産磁器皿、12の須佐産陶器すり鉢が出土した。いずれのトレンチからも古代から近代までの遺物が出土している。

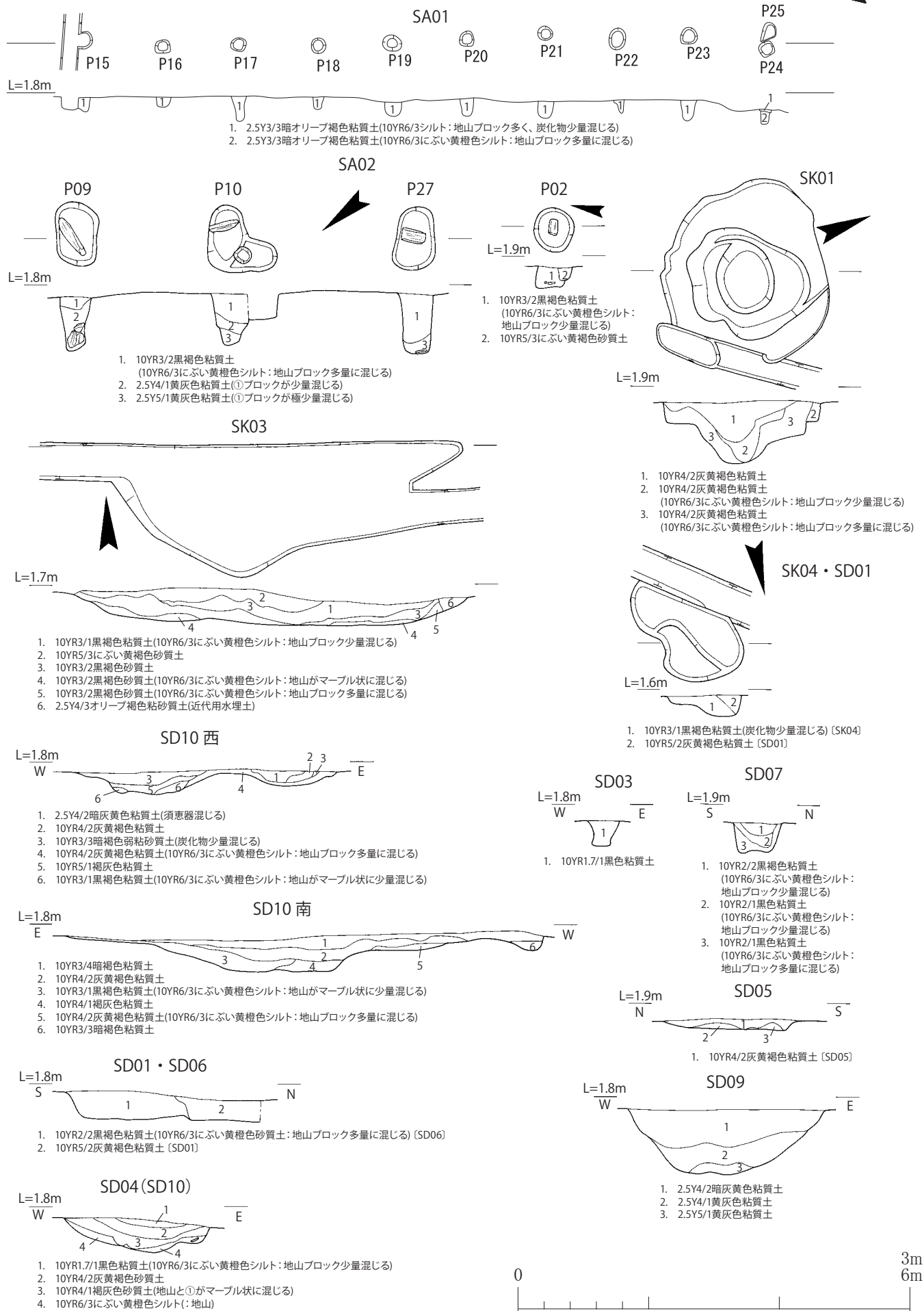
SD03(第3・4・9図) 調査区中央北端で検出された小規模な溝である。H22年度調査区へは続かなかった。第9図13～15が出土している。13は口縁がラッパ状に開く壺、14は頸部が長く直線的に開く形態の口縁を持つ壺、15は頸部で口縁を外反させる甕で摩滅が激しい。いずれも弥生時代後期に属すると考えられる。

SD05(第3・4・9図) 調査区南東端で検出された小規模な溝でSD01に壊されている。第9図16の口縁部が有段擬凹線となっている弥生時代終末頃の甕や17の弥生時代中期頃の様相を呈する甕底部が出土した。

SD08(第3・5・10～14図) 調査区西端で検出した大規模な川跡である。平成22年度調査区のSD18に続くと考えられるが、SD18のような近世・近代の遺物の出土は見られなかった。また平成24年度に発掘調査が行われた、現在の鞍月用水を挟んで西に隣接する大友F遺跡で検出されたSD01にもつながる川であると考えられる。出土遺物は弥生時代終末頃の遺物が大半を占めるが第12図1の布留甕や3の弥生時代前半に属すると

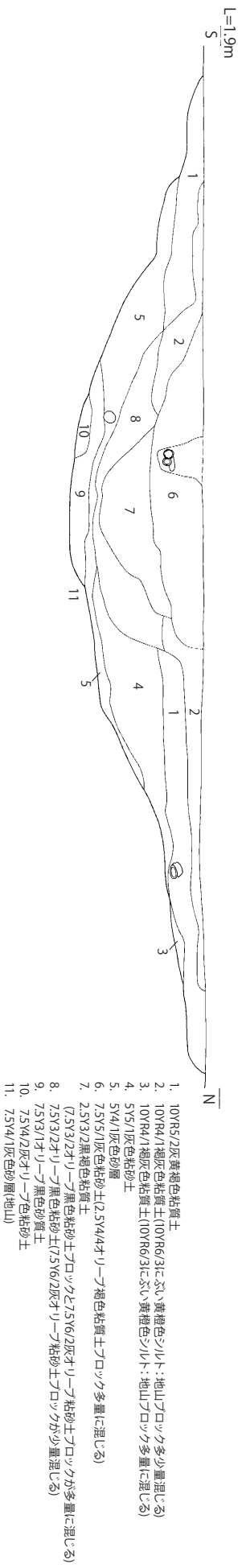
思われる土器等も混入する。SD08の上層から出土した遺物は第10図1～13である。1と2は外反口縁の甕である。3は有段口縁で口縁内面に指頭圧痕が認められる。口縁は直立する。4は有段口縁であるが、段差が弱く口縁と頸部の径に差がみられない。5の甕は有段口縁で口縁部が直線的で内面に指頭圧痕が認められる。6の甕は有段口縁で口縁部が直線的ではあるが、端部でやや外反する。7の甕は有段口縁で直線的ではあるが、やや外側へ開く。8・9も有段擬凹線の甕で口縁部の形態は直立し端部で外反する。8は口縁部内面に指頭圧痕が認められる。10は有段口縁の甕で直線的で端部が外反する口縁部を持つ。11は甕の底部で外面がハケ、内面がケズリ調整されている。12は蓋のつまみである。頂部の中央が窪み端部は外に向かって開く形態である。13は須恵器の鉢であろうか。口縁部が外へ開く形態である。次にSD08の下層から出土した遺物で第10図14～21が該当する。14は壺の頸部で内外面とも丁寧にミガキ調整が施されている。15は有段口縁の甕で、口縁部は直線的である。指頭圧痕が認められ、外面はハケ、内面はケズリ調整となっている。内外面とも煤が付着する。16は有段口縁の甕で口縁部は直線的だが外へと開く。内面には指頭圧痕が認められる。17は有段擬凹線の甕で口縁部は直立するが端部で外反する。18は甕の底部で外面はハケ、内面はケズリ調整である。19も甕の底部で外面はハケ、内面はケズリをした後ナデである。20は有段口縁の鉢状の杯部を持つ高杯で内外面ともケズリ調整がなされている。内面に煤が付着している。21は器台で口縁部は幅広の端面を持ち直線的で外へと開く。口縁外面は擬凹線が施され、内面はミガキ、杯部の内外面も丁寧にミガキ調整がなされている。内面には煤が付着している。SD08の最下層出土遺物は第10図22～24、第11図、第12図の1～7までが該当する。第10図22は有段擬凹線の壺の口縁部で内面には指頭圧痕が残る。外面はハケ、内面はケズリの後ナデ調整がなされている。23・24は台付壺であろうか。ともに外面は丁寧にミガキ調整がなされている。北陸系の祭祀土器である。第11図1は壺か甕の底部で外面はハケの後にミガキ調整、内面はナデ調整がなされている。2は小型甕で口縁部は有段で直線的に延び外側へ開く。外面はハケ、内面はケズリ調整である。3は甕の体部である。外面はハケ、内面はケズリ調整がなされている。4～6は有段口縁の甕で形態は直立する。内面には指頭圧痕がみられる。7は有段口縁の甕で直立する。8・10は有段擬凹線の甕で口縁部は直立し外へと開き、内面には指頭圧痕が認められる。9は有段擬凹線の甕で口縁部は直線的であるが、端部で外反する。内面には指頭圧痕が認められる。11は有段擬凹線の甕で口縁部は直立する。12～17は有段擬凹線の甕で口縁部は直線的で外へと開く。14～17には内面に指頭圧痕が認められる。18は口縁部が外側へ開く形態で端部に面を持つ甕である。第12図1はくの字口縁の甕であろう。2は短くくの字に屈曲する口縁も持つ甕か。3は弥生前半～中期にかけての土器である。外面には横引き凹線文が施される。4の器台は口縁部に幅広の端部を持ち端部はやや外反する。内外面は丁寧にミガキ調整がなされている。5は器台の脚部である。底部はハの字状に広がり外面は縦方向にミガキ調整されている。6は高杯で杯部の下部は浅い皿状を呈する。頸部は短く脚部はハの字状に広がる。7は高杯の脚部である。杯部の底は少し窪み鉢状になっている。頸部が短く底部にかけてハの字状に開く。第13図17の緑色凝灰岩の剥片が出土した。SD08を挟んで西側の大友F遺跡では玉造関連の石製品が多量に出土しているので、隣接する当遺跡にも玉関連の遺物が出土するのかもしれない。第13図22・23は敲き石であろうか。24は石斧の未製品であろうか。

SD09(第3・4・12図) 調査区北西端で検出した。溝としたが、土坑かもしれない。出土遺物は第12図8～10が出土した。8は須恵器有台坏で焼成が悪く胎土はにぶい褐色を呈する。9は珠洲焼の甕か。10は瀬戸産陶器天目碗であるが細片のため時期は不明である。その他、土師器、須恵器、染付、肥前産陶器甕等の細片が出土している。概ね近世には廃絶された遺構であろう。

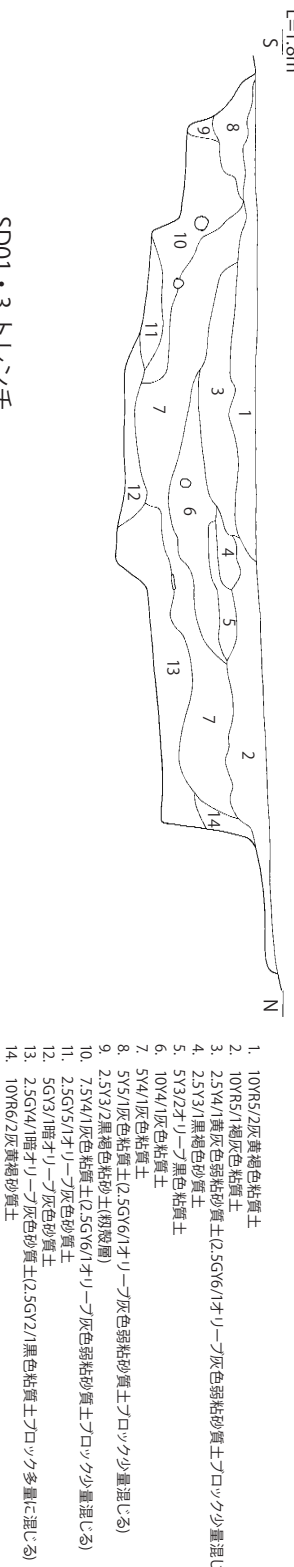


第4図 SA01(S=1/80)、SA02、SK01、SK03、SD10西、SD10南、SD06(SD10)・SD01、SD04(SD10)、SK04・SD01、SD03、SD07、SD05、SD09(S=1/40)

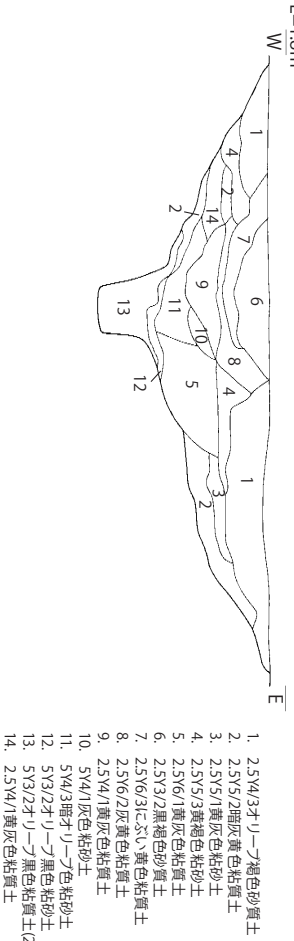
SD01・1トレンチ



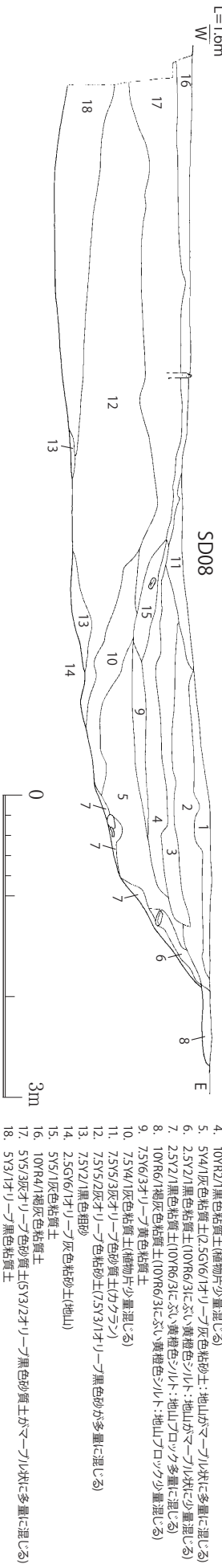
SD01・2トレンチ



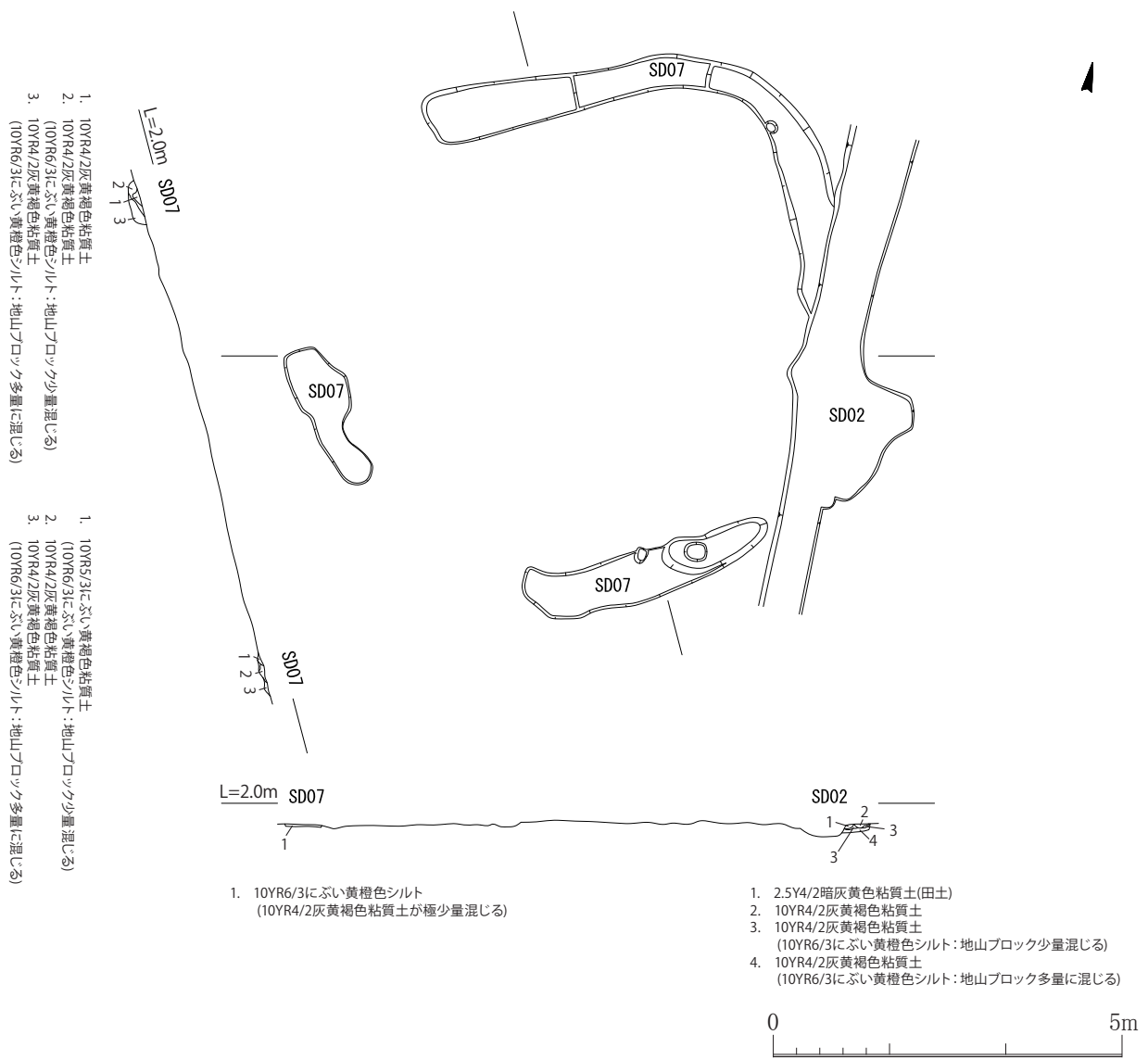
SD01・3トレンチ



SD08



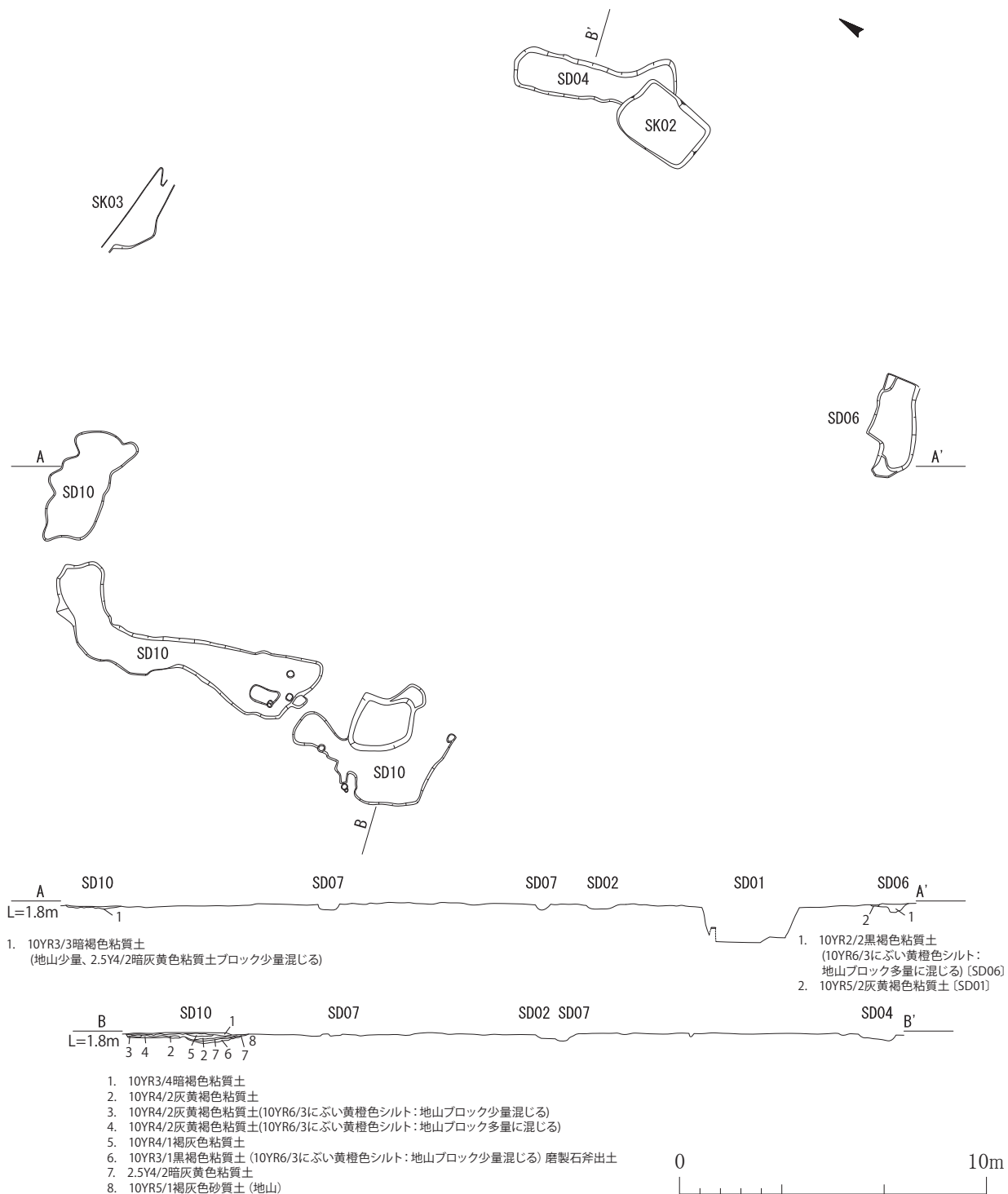
第5図 SD01・1トレンチ、SD01・2トレンチ、SD01・3トレンチ、SD08 (S=1/60)



第6図 SH01 (S=1/100)

5 包含層

第13図6は有段擬凹線の甕で口縁部は直立しやや外側へ開く。7は蓋で摩滅が激しい。頂部は中心部が少し窪み端部は開く。8は内面黒色土器の有台椀、9～12は肥前産と思われる磁器碗、13・14は磁器皿で13は底部が蛇目凹型高台となっている。15は磁器製の人形で白磁か。16は男性座像の土人形である。18は瑪瑙と考えられる剥片、19は緑色凝灰岩の剥片である。



第7図 SH02(SD10) (S=1/200)

第3節 木製品

P02(第3・14図) 調査区中央東寄りで検出した柱穴で第14図1の礎板が出土した。

SA02(第3・14図) SA02の柱穴から第14図2(P09)の柱根、3~5(P10)の礎板が出土した。SA02は調査区中央西寄りの南壁にかかる位置で検出した柵列で主軸は北で見ると東に41度傾く。

SD08(第3・5・14図) 第14図6~11が出土した。6は杭状の木製品で先端部が焦げている。7~9は棒状木製品、8、9は板状木製品である。いずれも用途は不明である。

SD10(第3・4・7・14図) 第14図10が下層より出土した。用途不明の板状木製品である。

SD01・1トレンチ(第3・7・14図) 第14図13の木簡が出土した。薄く削った板の表裏に「五ツ 二銭」「□ 二銭」と墨書が認められる。第14図14~17は下駄である。14は差し歯下駄の歯、15は黒漆を塗った下駄である。16、17は連歯下駄か。

SD01・2トレンチ(第3・7・14図) 第14図18の下駄と思われる製品、19の外面が黒漆、内面が赤漆を塗った漆器蓋が出土した。

表2 SH観察表

遺構名	調査区	平面形	規模(間)	方位軸	長辺(m)	短辺(m)	構成遺構	時代・特記
SH01	J15~K15	方形		N60° E	8.2	7.7	SD07	
SH02	J・K14~16	不明		N20° W	26.6	23.8	SK03、SD04、SD06、SD10	

表2 SA観察表

遺構名	調査区	平面形	規模(間)	方位軸	長辺(m)	短辺(m)	構成遺構	時代・特記
SA01	J14~J15	直線	(5)	N4° W	11.6		SP95~100	
SA02	J15	直線	5	N41° E	3.3		SP09、SP10、SP27	礎板

表3 SK観察表

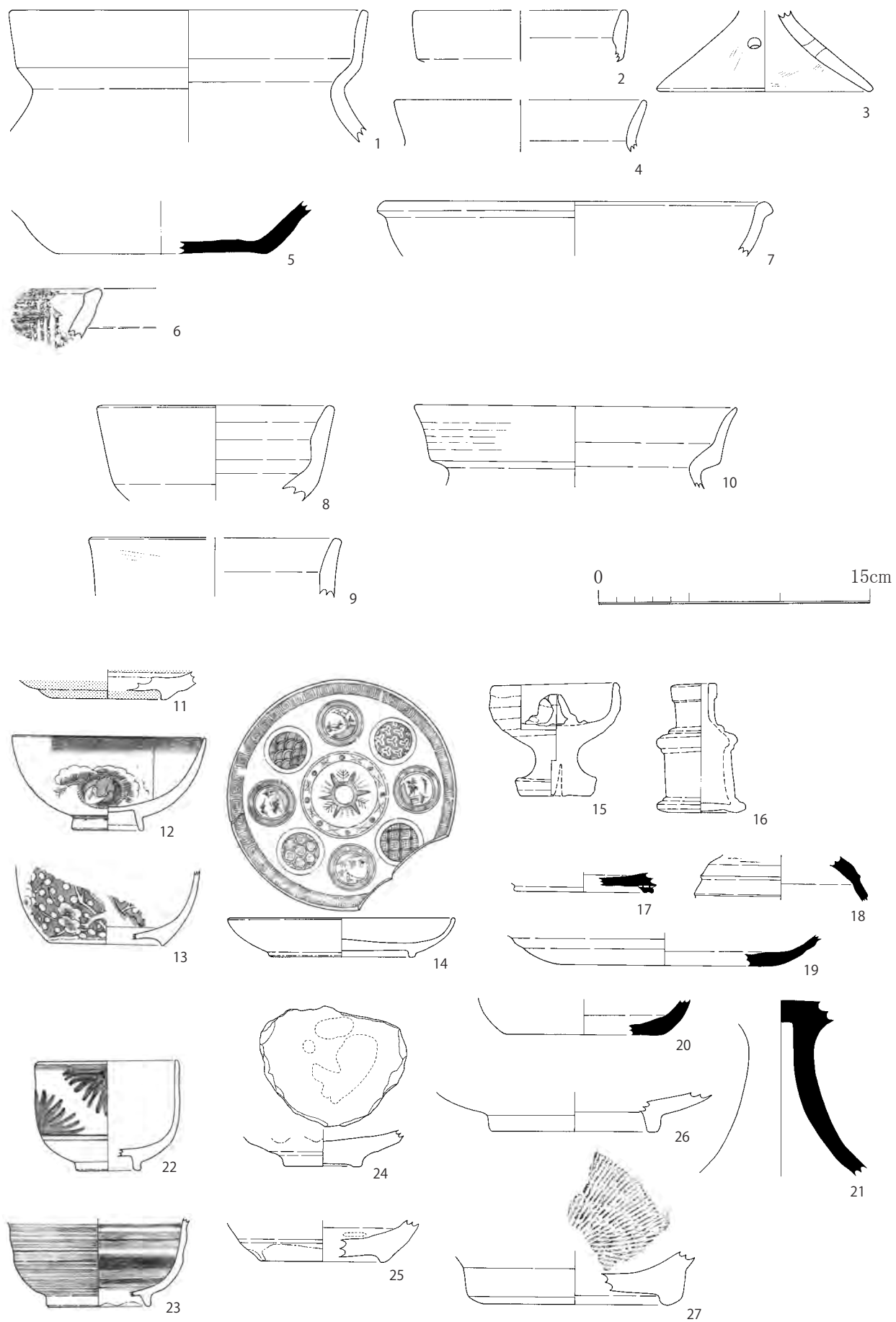
遺構名	調査区	平面形	断面形	方位軸	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	土色等	時代・特記
SK01	N16	逆三角形	血形	N23° E	140	134	49	断面図参照	SK02(古)→SK01(新)
SK02	M15	長方形		N2° E	283	200	80	10YR6/1褐灰色粘砂質土	
SK03	L14	血形		N85° E	306		23	断面図参照	SD10の一部か
SK04	J15			N50° W	111	60	23	断面図参照	

表4 SD観察表

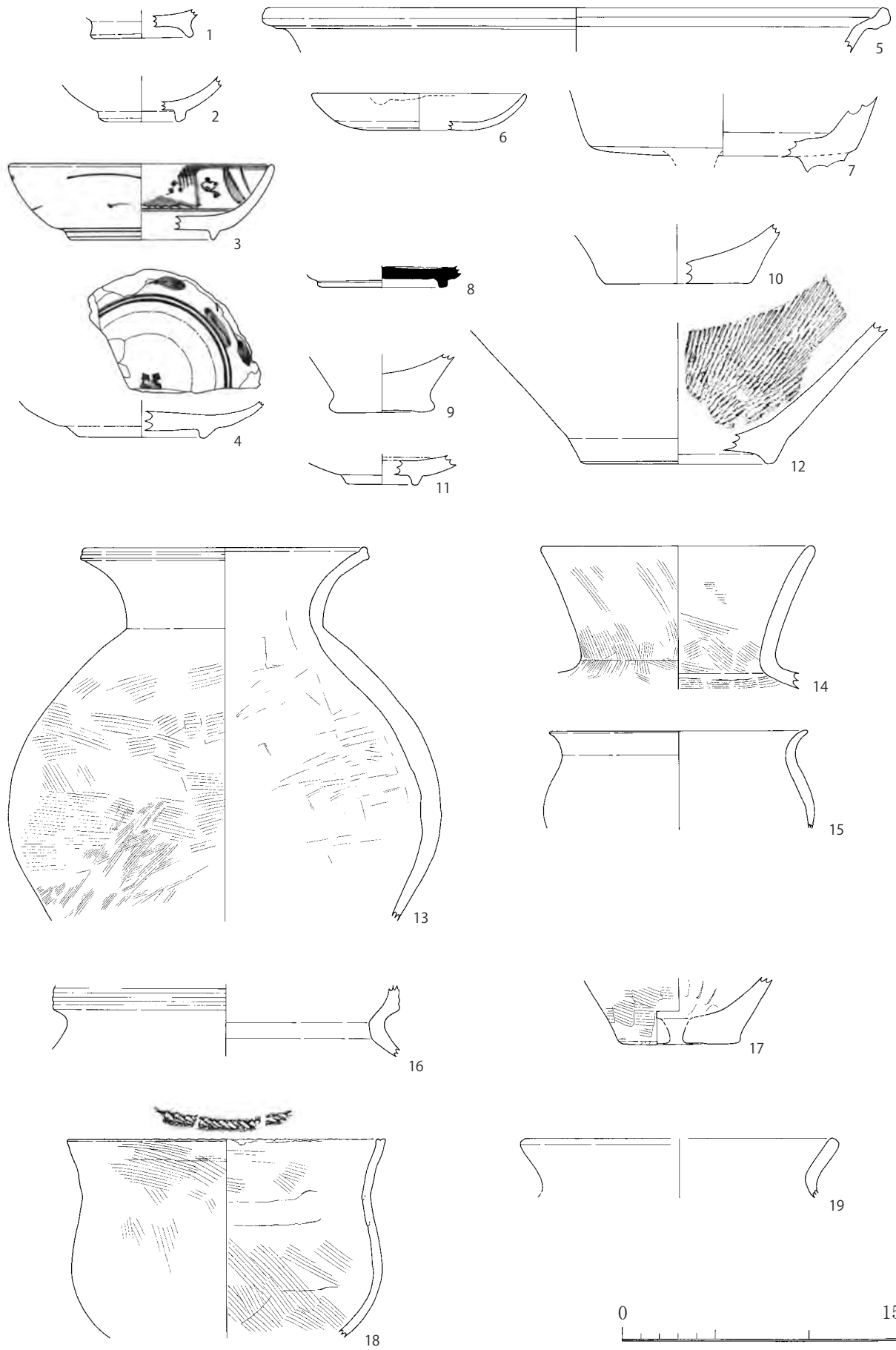
遺構名	調査区	平面形	断面形	方位軸	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	土色等	時代・特記
SD01	N15~K16	L字	血形	N1° E N89° W	620		110	断面図参照	近世~近代河川跡
SD02	L14~L16	直線	箱形	N1° E	241	90	16		現代用水跡
SD03	M14	直線	逆台形	N13° W	263	26	27	断面図参照	
SD04	M15	楕円形	血形	N33° W	529	118	15	断面図参照	SD04(古)→SK02(新) SD10と同一か
SD05	M16		血形	N67° W	490	124	4	断面図参照	
SD06	M16~L16		箱形	N69° W	344	164	24	断面図参照	SD10と同一か
SD07	K15~L15	方形	血形	N24° W	(1372)	77	25	断面図参照	
SD08	H14~I14		血形		994		121	断面図参照	古墳時代の川跡
SD09	I14~J14	不整形	楕円形	N1° W	202	169	35	断面図参照	土坑か(SK)
SD10	K14~K16	円形か	血形	N26° W	(2967)	220	10	断面図参照	SK03、SD04、SD06全て同一の環状溝か

表5 P観察表

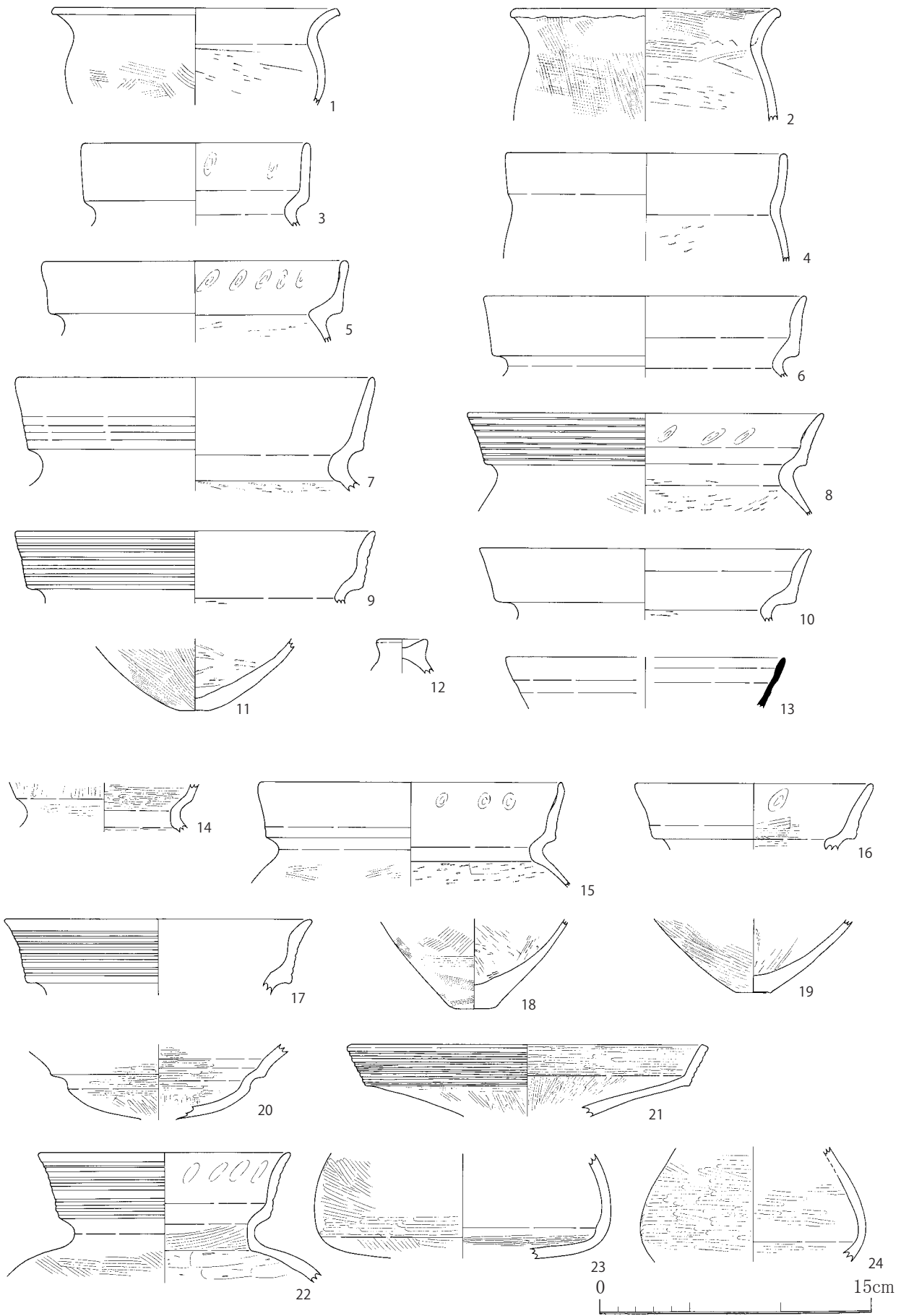
遺構名	調査区	平面形	断面形	方位軸	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	土色等	時代・特記
P01	M15	楕円形		N25° E	24	20	8	10YR3/1黒褐色粘質土(地山混)	
P02	L15	円形	箱形	N84° E	37	34	17	断面図参照	柱根
P03	L14	円形		N0° E	24	24	14	10YR3/2黒褐色粘質土(地山混)	
P04	L15	円形		N0° E	24	24	20	10YR1.7/1黒色粘質土(地山混)	
P05	L16	楕円形		N71° E	42	32	35	10YR5/1褐灰色粘質土(炭混)	
P06	M17	不明			86	(20)	12	10YR3/2黒褐色粘質土(地山混)	
P07	L14	楕円形		N37° W	62	39	4	10YR3/1黒褐色粘質土(地山混)	
P08	L15							10YR5/3にぶい黄褐色砂質土(地山)	地山に縄文土器が混入している
P09	J15	楕円形	円筒形	N51° W	54	34	61	断面図参照	SA02
P10	J15	楕円形	円筒形	N55° W	58	36	52	断面図参照	SA02
P11	K15	楕円形		N3° E	25	21	8	10YR6/2灰黄褐色粘質土	
P13	J15	円形		N0° E	24	24	35	10YR4/1褐灰色粘質土(炭・地山混)	
P14	K15	楕円形		N6° W	50	25	28	10YR5/1褐灰色粘質土	ハサカか
P15	J14				29	24	20	断面図参照	SA01
P16	J14	楕円形	円筒形	N9° W	26	23	119	断面図参照	SA01
P17	J14	楕円形	円筒形	N3° E	25	24	39	断面図参照	SA01
P18	J14	円形	円筒形	N75° E	24	26	29	断面図参照	SA01
P19	J14	円形	円筒形	N4° E	32	29	35	断面図参照	SA01
P20	J14	円形	円筒形	N78° W	26	24	48	断面図参照	SA01
P21	J14	円形	円筒形	N0° E	25	24	55	断面図参照	SA01
P22	J15	楕円形	円筒形	N84° W	38	26	32	断面図参照	SA01
P23	J15	円形	円筒形	N45° W	22	31	31	断面図参照	SA01
P24	J15	正方形	円筒形	N7° E	28	28	29	断面図参照	SA01
P25	J15	不整形		N55° W	35	23	7	10YR4/2灰黄褐色粘質土	
P26	J15	円形		N0° E	22	20	36	10YR3/1黒褐色粘質土(炭・地山混)	
P27	J15	円形	円筒形	N51° W	55	34	74	断面図参照	SA02



第8図 P07(1)、P09(2)、P11(3)、P26(4)、SK02(5~7)、SK04(8~10)、SD01・1トレンチ(11~17)、SD01・1トレンチ最下層(18~27) (S=1/3)



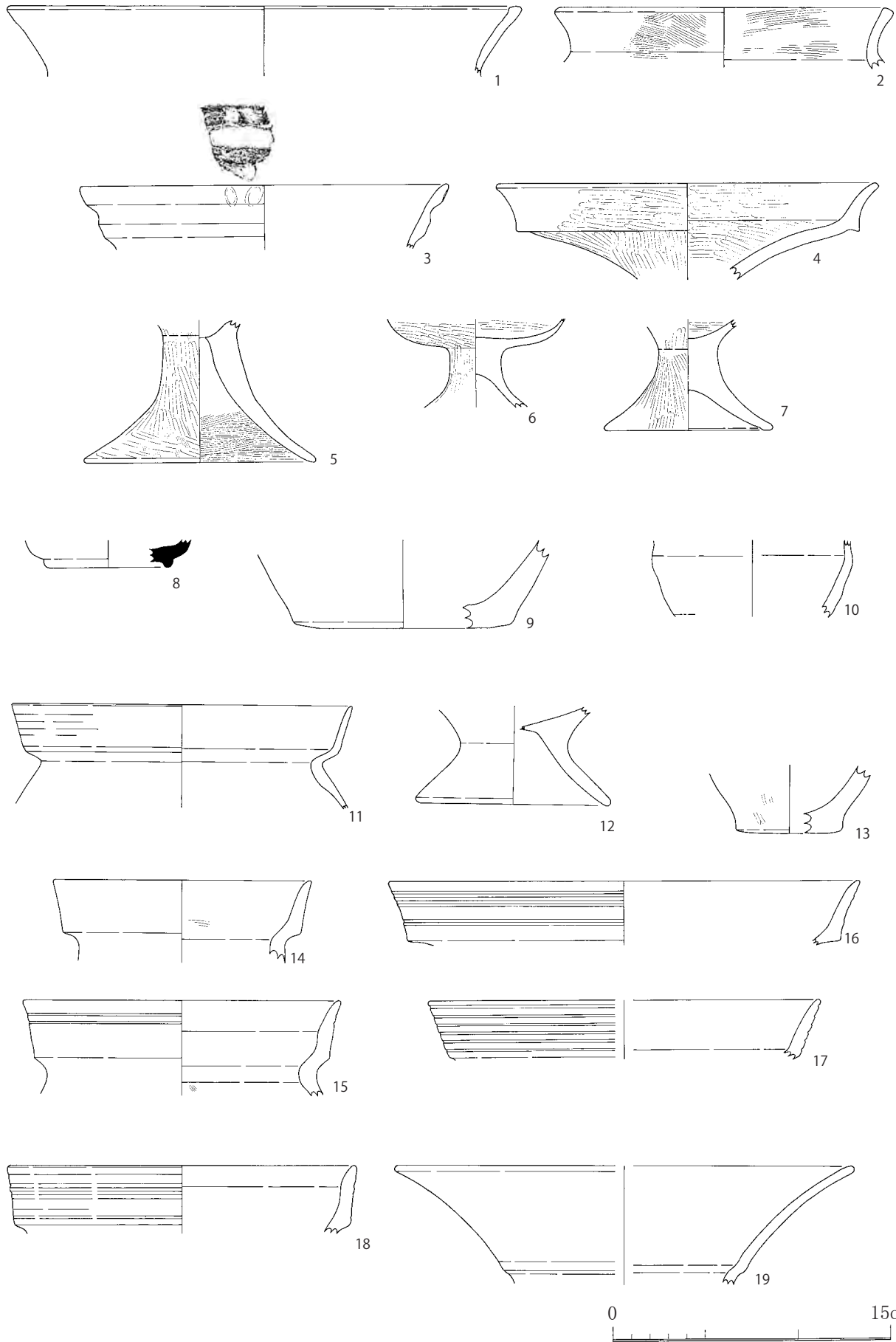
第9図 SD01・2トレンチ下層(1)、SD01・2トレンチ最下層(2~4)、SD01・3トレンチ上層(5~7)、SD01・3トレンチ下層(8~12)、SD03(13~15)、SD05(16~17)、SD07S(18)、SD07N(19) (S=1/3)



第10圖 SD08上層(1~13)、SD08下層(14~21)、SD08最下層(22~24) (S=1/3)



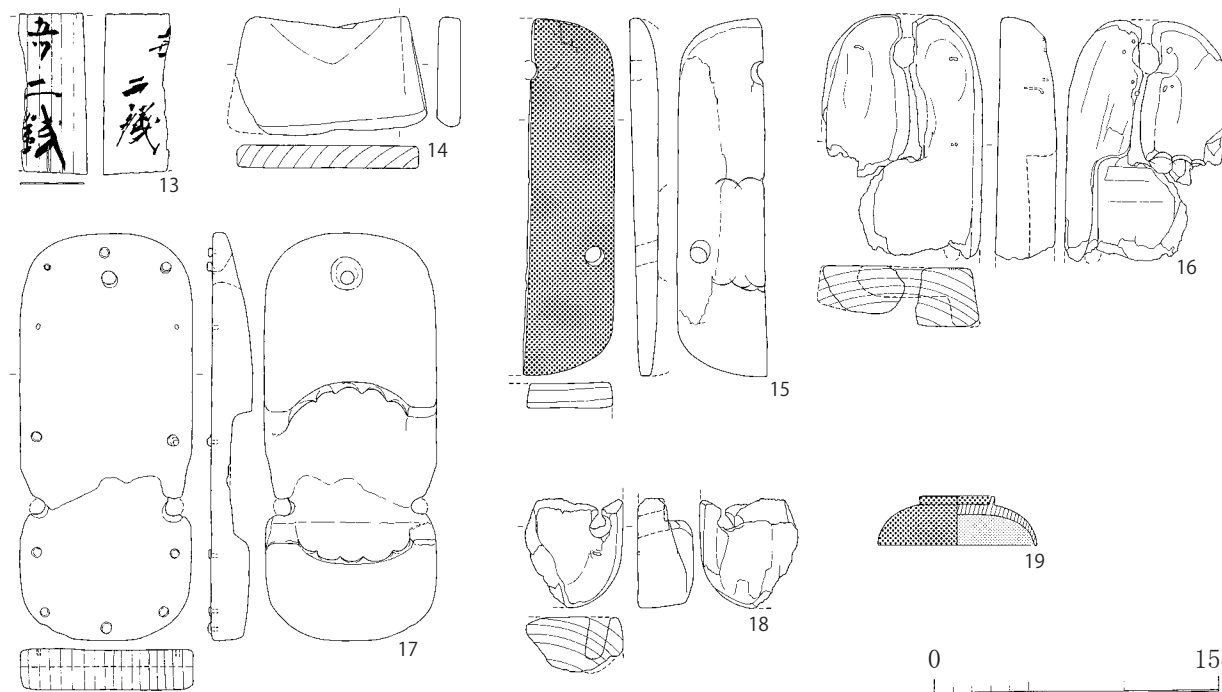
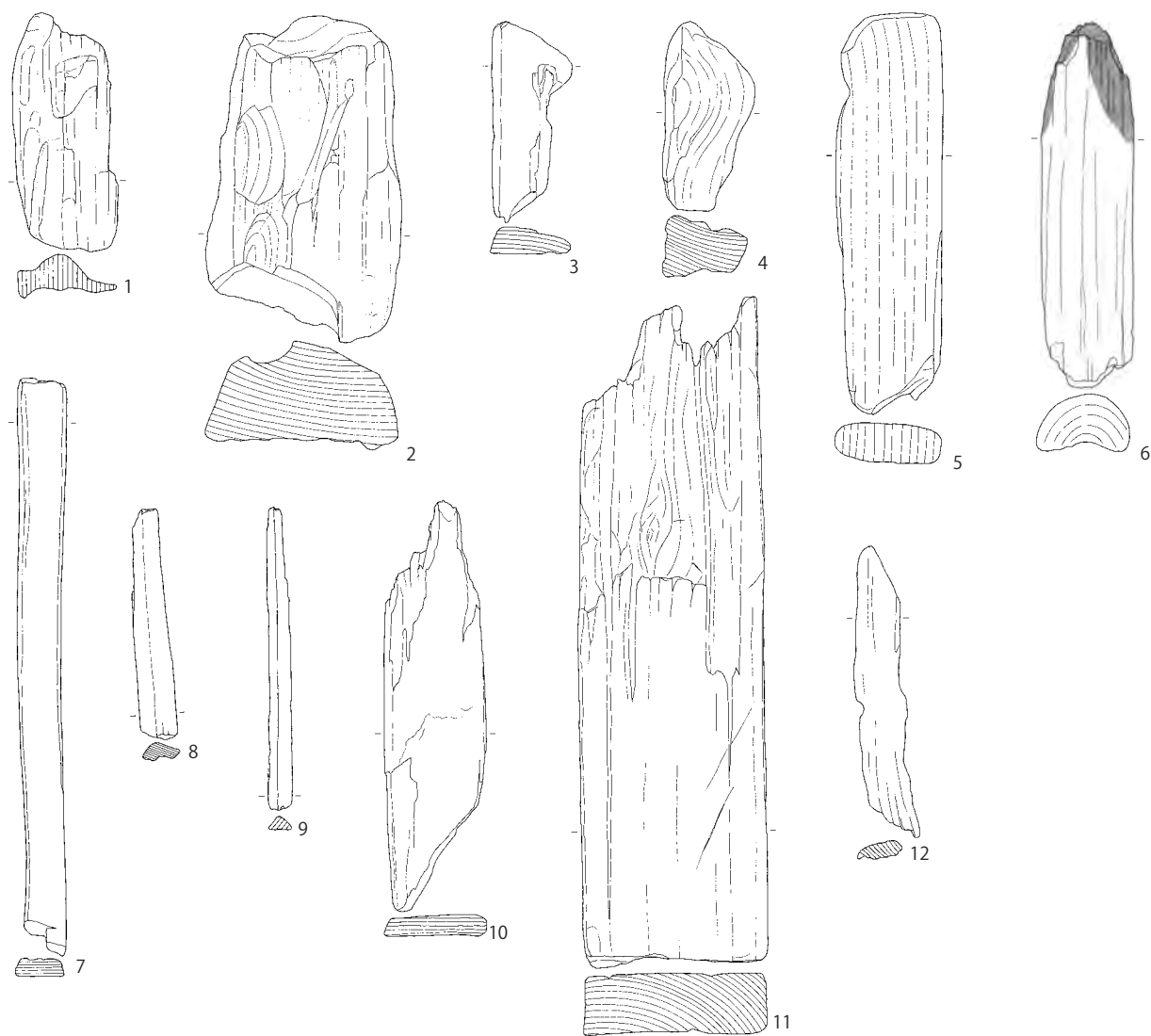
第11图 SD08最下層(1~18) (S=1/3)



第12図 SD08最下層(1~7)、SD09(8~10)、SK03(SD10の一部:11、12)、
SD04(SD10の一部:13~16)、SD06(SD10の一部:17)、SD10南西(18)、
SD10西(19) (S=1/3)



第13図 SD10南(1~3)、SD10北西(4)、包含層(5~16) (S=1/3、○数字はS=1/2)
 石製品:SD08最下層(17、22~24)、SK03(SD10の一部:20)、SD10(21)、
 包含層(18~19) (S=1/3)



0 15cm

第14図 木製品P02(1)、P09(2)、P10(3~5)、SD08下層(6~11)、SD10西(12)、SD01・1トレ(13)、SD01・1トレ下層(14~17)、SD01・2トレ下層(18・19) (S=1/4)

表6 土器・陶磁器・土製品観察表

(単位:mm)

図版No.	No.	遺構	地区	種類 器種	口・長	底・幅	高・厚・ 径	頸	胴部最大 径	遺存 度	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調 (釉色調)	内面色調 (素地色調)	礫	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.
8	1	P07	L14	土師器 壺	200		(73)	174		口1	マツ	マツ		2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙		少	並	少	並		A23
	2	P09	J15	土師器 壺	120		(29)			口1 以下	ハクリマツ	ナデ		2.5YR7/8 橙	2.5YR7/8 橙		少	少	並	並		A22
	3	P11	K15	土師器 脚部		120	(45)			底2	マツミガキ	ハケ		7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白		少	少	少	並	穿孔1残 SD10南内ヒット	A32
	4	P26	J15	土師器 壺	140		(29)			口1 以下	マツ	マツ		5YR5/1 褐灰	5YR6/1 褐灰		少	少		並		A21
	5	SK02	M15	須恵器 壺		120	(30)			底2	ナデ	ナデ		N4/0 灰	N7/0 灰白		少			並	外面ス付着	A16
	6	SK02	M15	陶器 すり鉢			(28)			口1 以下					10Y6/1 灰						越前産	A15
	7	SK02	M15	陶器 鉢	220		(30)			口1				灰釉	2.5Y7/2 灰黄							A17
	8	SK04	J15	土師器 壺	132		(53)			口2	ナデマツ	ナデ		2.5YR7/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙		少	少	少	並		A19
	9	SK04	J15	土師器 壺カ	140		(32)			口1 以下	ハケ	ナデ		5YR6/3 にふい橙	5YR7/9 明褐灰		少	少	少	並		A20
	10	SK04	J15	土師器 壺	180		(45)	140		口2	ハクリマツ	ナデマツ ハクリ		7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白		少	少	少	並	口縁部擬凹線5条以上	A18
	11	SD01 1トレンチ	M16	磁器 碗	108	40	52			口7				透明釉 色絵(緑)	9/ 白						銅板転写	Q7
	12	SD01 1トレンチ	M16	磁器 蓋物		64	(42)			底3				透明釉	9/ 白						銅板転写 外面底部の無釉部 分全面に墨塗布	Q8
	13	SD01 1トレンチ	M16	磁器 皿	127	81	22			口10				透明釉	9/ 白						銅板転写	Q6
	14	SD01 1トレンチ	M16	施釉土 器薬燭	71	40	64			底12			糸切底	透明釉	7.5YR7/4 にふい橙						径12mm 底部中央に穴 灯芯油痕有	Q3
	15	SD01 1トレンチ	M16	ガラス 瓶	25	49	72		45	完形												Q2
	16	SD01 1トレンチ	M16	土師器 有台杯		78	(11)			底1 以下	ナデ	ナデ	ヘラ切	10YR7/1 灰白	10YR7/2 にふい黄橙		少			並	貼り付け高台	Q5
	17	SD01 1トレンチ 最下層	M16	須恵器 蓋			(25)				ナデ	ナデ		10YR7/1 灰白	10YR7/1 灰白		少			不		E18
	18	SD01 1トレンチ	M16	須恵器 無台杯		120	(18)			底1 以下	ナデ	ナデ		2.5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	極 少	少			並		Q4
	19	SD01 1トレンチ 最下層	M16	須恵器 無台杯		88	(20)			底2	ナデ	ナデ	ヘラ切後ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白		少	少		並		E14
	20	SD01 1トレンチ 最下層	M16	須恵器 高杯			(98)	36		頭12	ナデ	ナデ		2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					並		E19
	21	SD01 2トレンチ 最下層	L16	陶器 碗	78	36	61			底2				透明釉 鉄絵	2.5Y6/2 灰黄						内外面貫入	E13
	22	SD01 1トレンチ 最下層	M16	磁器 皿		69	(16)			底2				青磁釉	7.5Y7/1 灰白						見込み蛇目釉剥ぎ 内面に酸化物付着	E12
	23	SD01 2トレンチ 最下層	L16	陶器 碗		58	(47)			底1				灰釉 白化粧土	10YR6/3 にふい黄橙						肥前産 刷毛目 内外面貫入	E21
	24	SD01 1トレンチ 最下層	M16	陶器 皿		44	(20)			底3				灰釉	2.5Y6/2 灰黄						見込み砂目跡3残	E16
	25	SD01 1トレンチ 最下層	M16	陶器 皿		68	(23)			底1 以下				灰釉	10YR7/3 にふい黄橙						見込み砂目跡1残	E15
	26	SD01 1トレンチ 最下層	M16	陶器 皿		94	(22)			底2				灰釉 白化粧土	5YR5/4 にふい赤褐						見込み砂目跡1残	E17
	27	SD01 1トレンチ 最下層	M16	陶器 すり鉢		120	(25)			底1 以下				鉄泥	鉄泥 5YR5/4 にふい赤褐							E20
9	1	SD01 2トレンチ 最下層	L16	土師器 有台碗	54		(15)			底5	マツ	マツ		7.5YR7/3 にふい橙	7.5YR7/3 にふい橙		少	少	並		E4	
	2	SD01 2トレンチ 最下層	L16	陶器 碗	46		(24)			底2				灰釉	2.5Y7/1 灰白							E2
	3	SD01 2トレンチ 最下層	L16	磁器 皿	144	78	41			底4				透明釉	N7/ 灰白						肥前産 高台内圏線一条A 見込みに付着物有	E3
	4	SD01 2トレンチ 最下層	L16	磁器 皿	70		(19)			底3				透明釉	N7/ 灰白						見込み蛇目釉剥ぎ・コンヤク印判 五弁花文	E1
	5	SD01 3トレンチ 上層	I14	陶器 すり鉢	340		(24)			口1 以下				鉄釉	鉄釉 2.5YR5/3 にふい赤褐						肥前産	E9
	6	SD01 3トレンチ 上層	I14	陶器 灯明皿	116	56	(20)			口1					5YR4/6 赤褐						口縁部内外面に灯芯油痕有	E10
	7	SD01 3トレンチ 上層	I14	瓦質土器 火鉢	144		(42)			底1					7.5Y7/1 灰白						足1残	E11
	8	SD01 3トレンチ 下層	I16	須恵器 有台杯	70		(12)			底12	ナデ	ナデ	ヘラ切後ナデ	N6/6 灰	N5/ 灰		少		並	転用碗か 高台内墨痕有 底部周辺を打ち欠いている	E8	
	9	SD01 3トレンチ 下層	I16	土師器 不明	57		(32)			底1 以下	マツ	マツ		2.5Y7/3 浅黄	10YR7/2 にふい黄橙		並	少	並			E22
	10	SD01 3トレンチ 下層	I16	土師器 不明	78		(32)			底2	マツ	マツ		10YR7/2 にふい黄橙	2.5Y7/1 灰白		並	少	並			E5
	11	SD01 3トレンチ 下層	I16	磁器 皿	38		(16)			底4				透明釉	N8/ 灰白						見込蛇目釉剥ぎ 高台に砂目跡有	E6
	12	SD01 3トレンチ 下層	I16	陶器 すり鉢	105		(77)			底2				鉄泥	鉄泥 N6/ 灰							E7
	13	SD03	M14	土師器 壺	150		(202)	106	234	口10	ナデハケ	ケスリマツ		10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙		多	多	並			E26
	14	SD03	M14	土師器 壺	146		(78)	106		口1 以下	ナデハケ	ハケ後ナデ ハケ		2.5Y1/8 灰白	2.5Y1/8 灰白		並	並	並	並	外面酸化物付着	E24
	15	SD03	M14	土師器 小型壺	140		(53)	127		頭1	マツハクリ	マツハクリ		5YR4/4 にふい赤褐	5YR4/4 にふい赤褐		多	並	並	並	外面ス付着	E25
	16	SD05	M16	土師器 壺			(39)	172		頭1	ハケ	マツ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙		少			並	口縁部擬凹線有	Q14

図版 No.	No.	遺構	地区	種類 器種	口・長	底・幅	高・厚・ 径	頸	脚部最大 径	遺存 度	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調 (釉色調)	内面色調 (素地色調)	礫	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.	
9	17	SD05	M16	土師器 甕		66	(36)			底5	ハケ	ケスリ	ナデ 穿孔1	7.5YR6/3 にふい楊	7.5YR8/3 浅黄橙	少	並	少	並		Q13		
	18	SD07S	L15	土師器 甕	170		(107)	156	168	口2	ナデ ハケ後ナデ	ハケ		7.5YR5/3 にふい楊	10YR7/3 にふい黄橙	少	並	少	並		口縁部キガミ 外面ス付着	Q11	
	19	SD07N	K15	土師器 甕	165		(32)	148		口1 以下	マツ	マツ		2.5YR7/6 橙	5YR7/4 にふい橙	並	少	少	並		Q10		
10	1	SD08 上層	I14	土師器 甕	156		(54)	134	144	口2	ナデ ハケ	ナデ ケスリ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR8/2 灰白	並	少	少	並		T19		
	2	SD08 上層	I14	土師器 甕	144		(62)	128		口2	ナデ ハケ	ハケ ヘラケスリ		2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	並	多	少	並		外面一部黒斑有	T12	
	3	SD08 上層	I14	土師器 甕	124		(45)	110		口2	マツ ナデ	マツ		7.5YR8/2 灰白	7.5YR7/3 にふい橙	並	多	多	並		内面指頭圧痕	T17	
	4	SD08 上層	I14	土師器 甕	152		(59)	150		口1	マツ	マツ ヘラケスリ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	並	多	少	並			T15	
	5	SD08 上層	I14	土師器 甕	166		(45)	144		口1	マツ	マツ ヘラケスリ		7.5YR7/4 にふい橙	5YR7/6 橙	多	少	少	並		外面ス付着 内面指頭圧痕	T14	
	6	SD08 上層	I14	土師器 甕	176		(45)	152		口1	マツ	マツ		2.5Y6/1 黄灰	10YR8/4 浅黄橙	多	少	並			T18		
	7	SD08 上層	I14	土師器 甕	196		(63)	170		口3	ナデ マツ	ナデ ケスリ マツ		7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	多	多	並	並		外面ス付着 内面黒斑	T11	
	8	SD08 上層	I14	土師器 甕	196		(56)	164		口1	ナデ ハケ マツ	ナデ ケスリ マツ		7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	多	多	並	並		口縁部擬凹線8条 内面指頭圧痕	T10	
	9	SD08 上層	I14	土師器 甕	198		(40)	166		口1	マツ ナデ	マツ ナデ ヘラケ スリ		7.5YR8/2 灰白	7.5YR8/1 灰白	少	多	少	並		口縁部擬凹線7条	T16	
	10	SD08 上層	I14	土師器 甕	182		(40)	140		口1	マツ ナデ	マツ ヘラケスリ		2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	並	並	並	並		T13		
	11	SD08 上層	I14	土師器 底部		18	(40)			底12	ハケ	ケスリ	ナデ	10YR7/2 にふい黄橙	10YR6/1 褐灰	多	多	少	少	並	外面ス付着 内面黒斑 工具痕有	T9	
	12	SD08 上層	I14	土師器 蓋		ツマ 25	(19)			ツマ11	ナデ	ナデ		2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	並	並	少	並		T21		
	13	SD08 上層	I14	須恵器 鉢か		154	(28)			口1	ロウナデ	ロウナデ		N6/6 灰	N6/6 灰	並	並	並	並		T20		
	14	SD08 上層	I14	土師器 蓋			(27)	84		口3	ミガキ	ミガキ ナデ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	少	並	並	並		T8		
	15	SD08 上層	I14	土師器 蓋	166		(58)	146		口1	ハケ後ナデ	ナデ ケスリ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	並	多	少	並		外面ス付着 内面指頭圧痕	T3	
	16	SD08 下層	I14	土師器 蓋	130		(37)	93		口1	ナデ	ナデ ハケ後ナデ		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	並	並	少	並		外面ス付着 内面指頭圧痕	T7	
	17	SD08 下層	I14	土師器 蓋	170		(42)			口1	マツ	ナデ マツ		2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	多	多	少	並		口縁部擬凹線8条	T4	
	18	SD08 下層	H14	土師器 底部		22	(50)			底12	ハケ	ケスリ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR7/1 灰白	少	多	少	並		内面黒斑	T1	
	19	SD08 下層	I14	土師器 底部		18	(41)			底12	ハケ	ケスリ後ナデ	ナデ	N3/ 暗灰	10YR8/2 灰白	並	多	少	並		T2		
	20	SD08 下層	H14	土師器 高杯			(42)				ミガキ	ミガキ		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	少	少	並	並		有段鉢形高杯 内面ス付着	T5	
	21	SD08 下層	H14	土師器 器台	194		(40)			口2	ミガキ	ミガキ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	並	少	並	並		口縁部擬凹線8条 内面ス付着	T6	
	22	SD08 最下層	H14	土師器 壺	140		(72)	100		口4	ナデ ハケ	ナデ ハケ ケスリ後ナデ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	少	少	並	並		口縁部擬凹線8条 内面指頭圧痕	N14	
	23	SD08 最下層	H14	土師器 台付壺カ			(58)		164	口2	ミガキ	ナデ ハケ		2.5Y6/3 にふい黄	10YR7/3 にふい黄橙	少	並	少	並		内外面黒斑	N25	
	24	SD08 最下層	H14	土師器 壺			(63)		125	口3	ミガキ	ミガキ後ナデ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR7/3 にふい黄橙	並	少	少	並		内外面ス付着	N4	
11	1	SD08 最下層	H14	土師器 底部		54	(25)		底11	ハケ後ミガキ	ナデ	ナデ		10YR7/2 にふい黄橙	2.5Y8/3 浅黄	並	並	少	並		内外面ス付着	N1	
	2	SD08 最下層	H14	土師器 小壺	100		(38)	84	84	口1	ナデ ハケ	ナデ ケスリ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	並	少	並	並		N7		
	3	SD08 最下層	H14	土師器 甕			(75)	148	189	口2	ハケ	ケスリ		10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	多	少	並		N24			
	4	SD08 最下層	H14	土師器 甕	152		(88)	132		口2	ナデ ハケ	ナデ ケスリ		5YR6/4 にふい橙	7.5YR5/3 にふい楊	多	多	並	並		外面ス付着 内面指頭圧痕	N23	
	5	SD08 最下層	H14	土師器 甕	152		(33)			口2	ナデ	ナデ		5YR7/4 にふい橙	5YR6/4 にふい橙	並	少	並	並		外面黒斑 内面指頭圧痕	N12	
	6	SD08 最下層	H14	土師器 甕	136		(80)	118	130	口2	ナデ ハケ マツ	ナデ ケスリ		10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にふい黄橙	多	少	並	並		外面ス付着 内面指頭圧痕	N22	
	7	SD08 最下層	H14	土師器 甕	164		(63)	144		口3	ナデ ハケ	ナデ ハケケスリ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白	並	並	少	並		N2		
	8	SD08 最下層	H14	土師器 甕	168		(71)	132		口4	ナデ ハケ	ハケ後ナデ ハケケスリ		5YR6/6 橙	5YR4/2 灰褐	少	多	少	並		口縁部擬凹線8条 内外面ス付着 内面指頭圧痕	N13	
	9	SD08 最下層	H14	土師器 甕	192		(100)	162		口2	ナデ ハケ	ナデ ハケケスリ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	少	少	少	並		口縁部擬凹線8条 外面ス付着 内面指頭圧痕	N17	
	10	SD08 最下層	H14	土師器 甕	172		(82)	138		口2	ナデ ハケ後ナデ ハケ	ナデ ハケケスリ		10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にふい黄橙	少	多	少	並		口縁部擬凹線8条 外面ス付着 内面指頭圧痕	N20	
	11	SD08 最下層	H14	土師器 甕	168		(34)			口2	ナデ	ナデ		7.5YR7/6 橙	5YR4/3 にふい赤褐	並	少	少	並		口縁部擬凹線5条 外面黒斑	N11	
	12	SD08 最下層	H14	土師器 甕	180		(44)	140		口1	ナデ	ナデ ケスリ		7.5YR8/4 にふい橙	7.5YR7/6 橙	並	並	並	並		口縁部擬凹線6条 外面ス付着	N9	
	13	SD08 最下層	H14	土師器 甕	216		(44)			口1	ナデ	ナデ ハケ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	並	少	少	並		口縁部擬凹線8条 外面ス付着	N10	
	14	SD08 最下層	H14	土師器 甕	200		(40)			口1	ナデ	ナデ ハケ		10YR8/2 灰黄褐	10YR7/3 にふい黄橙	並	少	並	並		口縁部擬凹線8条 外面ス付着 内面指頭圧痕	N16	
	15	SD08 最下層	H14	土師器 甕	160		(62)	118		口2	ナデ ハケ後ナデ	ナデ ハケケスリ		10YR7/2 にふい黄橙	10YR8/2 灰白	多	少	並	並		口縁部擬凹線7条 外面焼キム 内面指頭圧痕	N18	
	16	SD08 最下層	H14	土師器 甕	212		(50)	172		口1	ナデ	ナデ		7.5YR7/3 にふい橙	5YR7/3 にふい橙	並	少	少	並		口縁部擬凹線4条 外面ス付着 内面指頭圧痕	N15	
	17	SD08 最下層	H14	土師器 甕	220		(47)	172		口1	ナデ	ナデ ハケケスリ		7.5YR7/3 にふい橙	10YR7/2 にふい黄橙	並	少	少	並		口縁部擬凹線6条 外面ス付着 内面指頭圧痕	N19	
	18	SD08 最下層	H14	土師器 甕	184		(27)			口1	ナデ	ナデ		10YR8/3 浅黄橙	10YR7/2 にふい黄橙	並	少	並	並		内面黒斑	N6	
12	1	SD08 最下層	H14	土師器 甕	280		(38)			口2	ナデ	ナデ		10YR3/1 黒褐	10YR8/3 浅黄橙	少	少	並	並		外面ス付着	N21	
	2	SD08 最下層	H14	土師器 甕	176		(33)	168		口1	ハケ	ハケ後ナデ		10YR7/4 にふい黄橙	10YR7/2 にふい黄橙	少	並	少	並		N5		
	3	SD08 最下層	H14	土師器 鉢	200		(35)			口1	ナデ	ナデ		10YR4/1 楊灰	10YR5/2 灰黄褐	並	並	並	並		外面横引凹線文一指ナデ	N8	
	4	SD08 最下層	H14	土師器 器台	208		(52)			口2	ミガキ	ミガキ		7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	並	少	並	並		N3		
	5	SD08 最下層	H14	土師器 高杯		124	(77)	40		底12	ミガキ ミガキ後ハ ケ後ナデ	ハケ		10YR7/3 にふい黄橙	10YR7/2 にふい黄橙	少	並	少	少	並		外面ス付着	N28
	6	SD08 最下層	H14	土師器 高杯			(48)	28		口7	ミガキ	ミガキ後ナデ ナデ		10YR6/2 灰黄褐	10YR6/1 褐灰	並	並	少	並		内外面黒斑	N26	
	7	SD08 最下層	H14	土師器 高杯		92	(60)	32		底2	ミガキ	ナデ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	並	少	並	並		N27		
	8	SD09	I14	須恵器 有台坏		70	(15)			底1	ロウナデ	ロウナデ		5YR7/4 にふい橙	5YR6/4 にふい橙	少	少	少	並		珠洲焼	A27	
	9	SD09	I14	陶器 鉢		120	(48)			底2	ナデ	ナデ		N6/0 灰	N6/0 灰	少	少	少	並		珠洲焼	A26	
	10	SD09	I14	陶器 碗			(42)							鉄釉	10YR7/1 灰白						天目碗	A25	
	11	SK03	L14	土師器 甕	185		(56)	153		口1	マツ	マツ		5YR4/1 楊灰	2.5YR7/6 橙	少	並	並	並		口縁部擬凹線5条以上	A14	
	12	SK03	L14	土師器 台付壺カ		106	(54)	58		底6	マツ	マツ		2.5YR3/1 暗赤灰	2.5YR3/1 暗赤灰	少	並	並	並		台付壺または台付鉢	A13	
	13	SD04	M15	土師器 底部		58	(37)			底2	マツ	マツ	マツ	10R6/6 赤橙	5YR7/8 橙	少	並	少	並		外面ス付着	Q18	
	14	SD04	M15	土師器 甕	139		(45)	112		口1	マツ	マツ		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	多	少	並	並		Q15		
	15	SD04	M15	土師器 甕	170																		

図版No.	No.	遺構	地区	種類 器種	口・長	底・幅	高・厚・ 径	頸	胴部最 大径	遺存 度	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調 (釉色調)	内面色調 (素地色調)	磯	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.
12	19	SD10西 下層	K15	土師器 高杯	250		(64)			口1 以下	マツ ハクリ	マツ ハクリ		7.5YR6/6 褐色	7.5YR7/4 にふい橙	少	少	少	並		A28	
	1	SD10南	K16	土師器 壺	180		(51)	156		口1		ナデ ケスリ		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	並			並	口縁部擬凹線6条 内面指頭圧痕	A33	
	2	SD10南	K16	土師器 底部		72	(25)			底2	ハケ	ハケ		7.5YR7/4 にふい橙	7.5YR6/1 褐灰	少	少	少	並		A34	
	3	SD10南	K15	土師器 不明			(80)				ハケカ			7.5YR4/3 褐	7.5YR6/1 褐灰	少	少	少	並		A31	
	4	SD10北西	K14	土師器 壺	180		(58)	152		口3	マツ ハクリ	ナデ マツ ケスリ		2.5YR7/3 淡赤橙	5YR8/3 淡橙	少	並	少	並	口縁部擬凹線8条 外面入付着 内面指頭圧痕	A30	
	5	包含層	L15	縄文 深鉢			(63)			口1 以下	糸痕			7.5YR6/4 にふい橙	7.5YR7/4 にふい橙	少	少	少	並	外面入付着、地山から出土	A10	
	6	包含層	K15	土師器 壺	160		(50)	140		口1 以下	マツ	ハクリ マツ ナデ ケスリ		7.5YR7/3 にふい橙	7.5YR7/3 にふい橙	少	並	少	並	口縁部擬凹線7条	A5	
	7	包含層	L14	土師器 蓋	128	ツミ 33	51			ツミ9	マツ	マツ	マツ	7.5YR8/2 灰白	7.5YR6/2 灰白	少			並		A24	
	8	包含層	I14	内黒 有台碗	51		(20)			底12	ナデ	マツ	回転糸切痕 マツ	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR4/1 褐灰	少		少	並		A9	
	9	包含層	K15	磁器 碗	120		(50)			口2				透明釉	9/ 白					肥前産、貫入	A1	
	10	包含層	K16	磁器 碗	104		(39)			口4				透明釉	9/ 白					肥前産	A3	
	11	包含層	K16	磁器 碗	72	36	59			口2				透明釉	9/ 白					肥前産	A6	
	12	包含層	K15	磁器 碗			(42)	(40)		高台1 以下				透明釉	9/ 白					肥前産、外面コンヤウ印判	Q9	
	13	包含層	K16	磁器 皿	82		(17)			底3				透明釉	9/ 白					肥前産	A2	
14	包含層	K16	磁器 皿	100	55	23			口2				透明釉	9/ 白					型押成形	Q1		

表7 土人形観察表

図版 番号	番号	遺構	地区	種類 器種	法量				釉調 給付	色調 産地	備考	実測 番号
					a	b	c	重量				
13	15	包含層	J14	人形	(31)	(23)	(20)	7.2	白磁	白	中空 型合	A11
	16	包含層	K16	男性座像	(49)	(80)	38	73.7		淡褐色 在地	中実、型合、刀・ 弓・矢穴有	A4

表8 石製品観察表

図版 No.	No.	遺構	地区	器種	口(長)	底(幅)	高 (厚・径)	重量 (g)	色調	備考	実測No.
13	17	SD08 最下層	H14	剥片	44	28	24.0	22.68	7.5GY5 /1緑灰		N29
	18	包含層	N15	剥片	24	21	13.0	3.40	7.5YR6 /8橙	瑪瑙か	A7
	19	包含層		剥片	27	31	20.0	15.10	10GY7 /1明緑 灰		A8
	20	SK03	L14	砥石	(89)	78	35.0	350.00	10Y6/1 灰	全面砥面	A12
	21	SD10南	K16	磨製石斧	(131)	67	41.0	640.00	7.5Y6/ 1灰		E23
	22	SD08 最下層	H14	不明	167	75	58.0	1150.00	7.5Y7/ 1灰白	片方の端部に敲 打痕	N32
	23	SD08 最下層	H14	不明	180	73	55.0	1100.00	7.5Y7/ 2灰白	両端部に敲打痕	N31
	24	SD08 最下層	H14	不明	195	106	42.0	1320.00	7.5Y6/ 2灰オ リ-7	石斧の未製品か	N30

表9 木製品観察表

図版 No.	No.	遺構	地区	種別	口(長)	底(幅)	高 (厚・径)	樹種	木取	備考	実測No.
14	1	P02	L15	礎板	(135)	(55)	(20.0)	針	柱目	礎板の残りか	N35
	2	P09	K15	柱根	(183)	109	(54.0)	針			N34
	3	P10	J15	礎板	(113)	(45)	15.0	針	板目	礎板の残りか	E27
	4	P10	J15	礎板	(106)	(51)	(34.0)	針	刃材	礎板の残りか	E28
	5	P10	J15	礎板	(225)	(60)	22.0	針	柱目	礎板の残りか	E29
	6	SD08 下層	H14	杭	(205)	52	28.0	広	刃材	端部に焦げあり	T26
	7	SD08 下層	H14	棒状	(325)	28	9.5	針	板目		T24
	8	SD08 下層	H14	棒状	(180)	(21)	(12.0)	針	柱目		T23
	9	SD08 下層	H14	棒状	(170)	13	7.0	針	柱目		T22
	10	SD08 下層	H14	板状	(230)	57	11.0	針	板目		T25
	11	SD08 下層	H14	板状	(377)	105	34.0	針	刃材		N33
	12	SD10西	K15	不明	(163)	(25)	(8.0)		柱目		E30
	13	SD01 1ト	M16	木簡	(85)	(34)	0.6	広	柱目	「五ツ二銭」「口二銭」	E31
	14	SD01 1ト下層	M16	下駄の歯	(63)	(110)	12.0	広	柱目		A37
	15	SD01 1ト下層	M16	下駄	190	(48)	(14.0)	広	板目	連歯 表面黒漆	A36
	16	SD01 2ト下層	L16	下駄	(128)	(85)	(31.0)	広	刃材	連歯か 表面鉄釘3残 表面鉄釘7残	Q20
	17	SD01 1ト下層	M16	下駄	260	91	22.0	広	板目	連歯 表面鉄釘9残	A35
	18	SD01 2ト下層	L16	下駄	(58)	(51)	(30.0)	広	刃材	表面鉄釘1残	Q21
	19	SD01 2ト下層	L16	漆器桶蓋	84	40	26.0	広	柱目	外面黒漆、内面赤漆	Q19

第4章 総括

調査結果から遺構の変遷を整理する。

縄文時代晩期

P08としたカ所で地山に縄文晩期の土器が刺さった状態でみつかったが明確な遺構は確認できなかった。平成22年度調査区でも同様なカ所がみつかったが遺構は確認されていない。地山形成時に混入したものか。

弥生時代

弥生時後期の土器が出土したSD03、弥生時代終末のSD05、SD08、SD10が該当する。SD03は小規模な溝であるが、掲載したような弥生時代後期の土器がまとまって出土しており、埋土も黒色粘質土で掘りかたがしっかりした溝である。しかし、平成22年度調査区へも続いておらず単独の遺構なので性格は不明である。SD05も小規模な溝で削平を受けたり、周囲に同時期の遺構がみつからないので性格は不明である。SD08は弥生時代終末の遺物が主体となって出土する川跡である。平成22年度の直江ボンシロ遺跡の調査でみつかったSD18や平成24年度の大友F遺跡でみつかったSD01と同じ川であると考えられる。

古墳時代

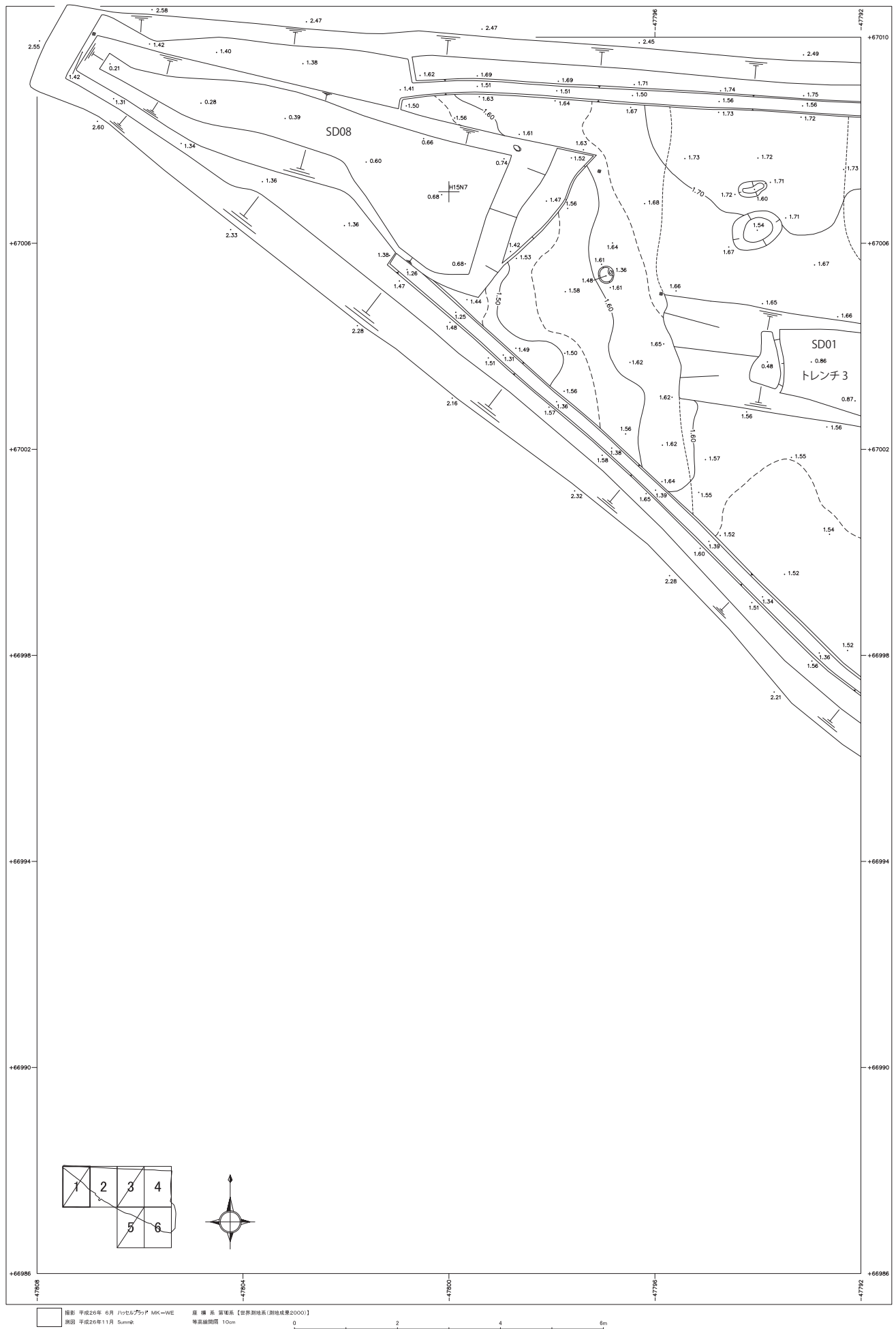
古墳時代の遺構としてはP07、P11、SA02、SK04、SD07、SD10がある。建物跡は削平を受けており確認できなかったが、周溝と考えられるSD07とSD10が痕跡を残している。主軸の方向はほぼ一致する。集落が存在していたと考えられる。

古代以降

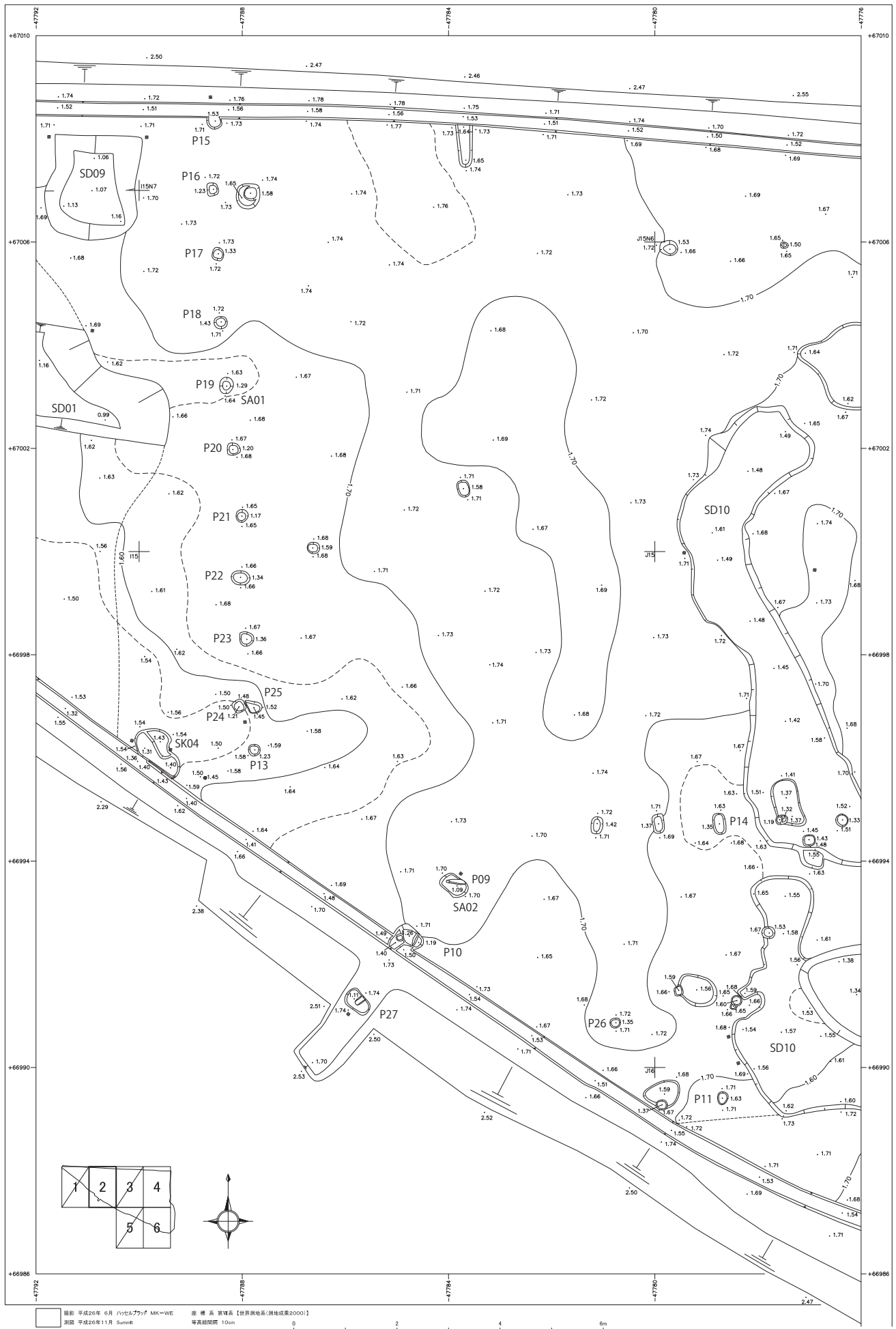
古代～中世までの明確な遺構は確認できず、SD01とSD09からわずかに古代・中世の遺物が出土したことから、当該地区周辺で人々が生活していたであろう痕跡が確認できる。

近世～近代においても明確な遺構はSD01とSD09のみである。集落の中心は遺跡の周囲にあると考えられる。SD01は調査区東西を流れ、おそらく北に直角に曲がると考えられる、古代から近代に続く川跡である。屈曲部は検出することが出来なかったが、東西方向と南北方向に設定したトレンチの埋土や出土遺物の様相から同じ溝と判断した。平成21年度調査区から検出されたSD01や平成22年度調査区で検出したSD09等の近世・近代の流路と同様な役割を果たしたものであろう。

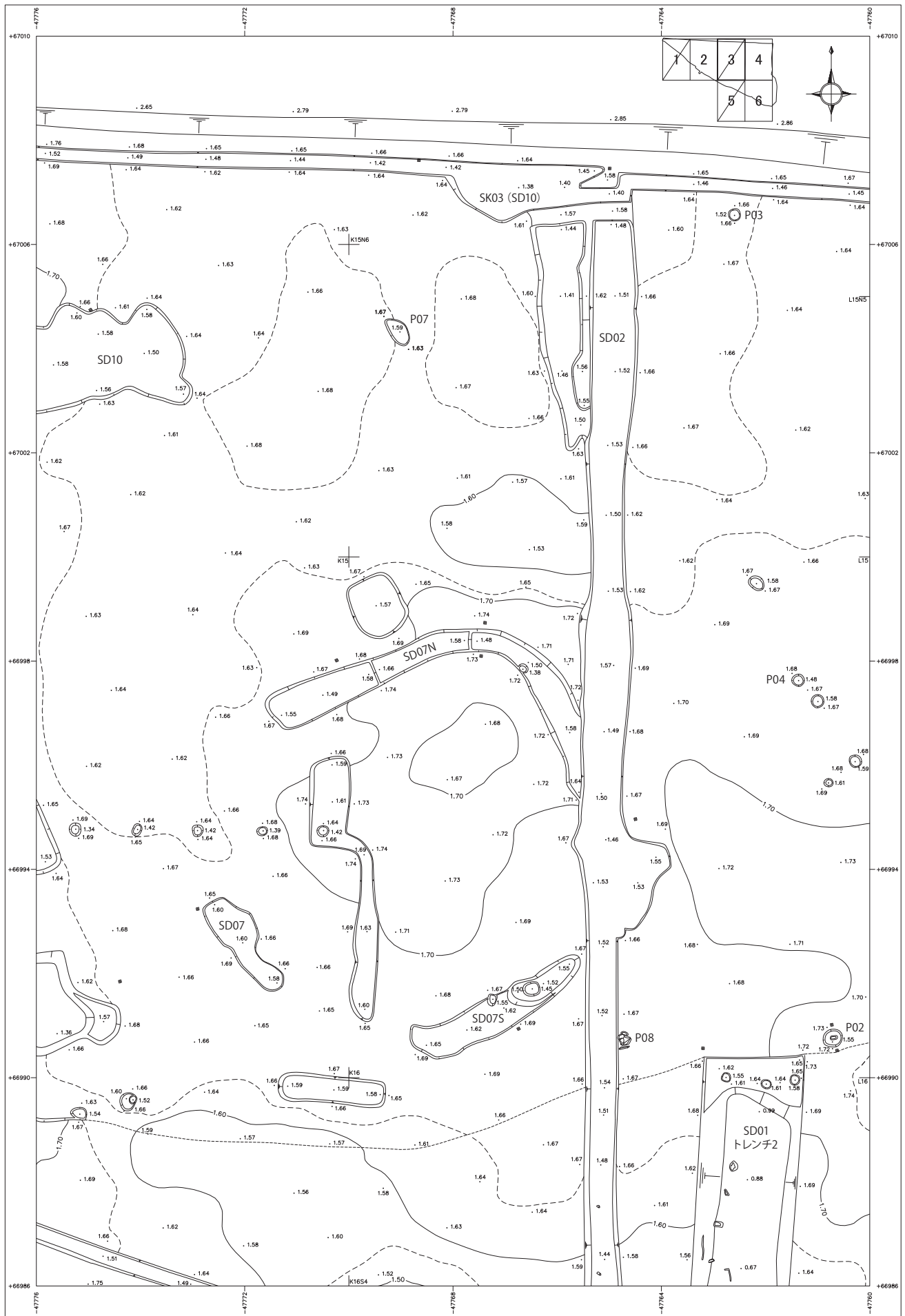
今回の調査区は平成22年度に公民館建設で調査したときと同様、遺構面の削平が大きく明確な遺構は確認できなかった。しかし古墳時代の集落の痕跡がわずかにでも確認できたことは大変有益であり、直江遺跡群や大友遺跡群で明らかになってきた当該地区の歴史の変遷をさらに明確に出来たのではないかと考える。



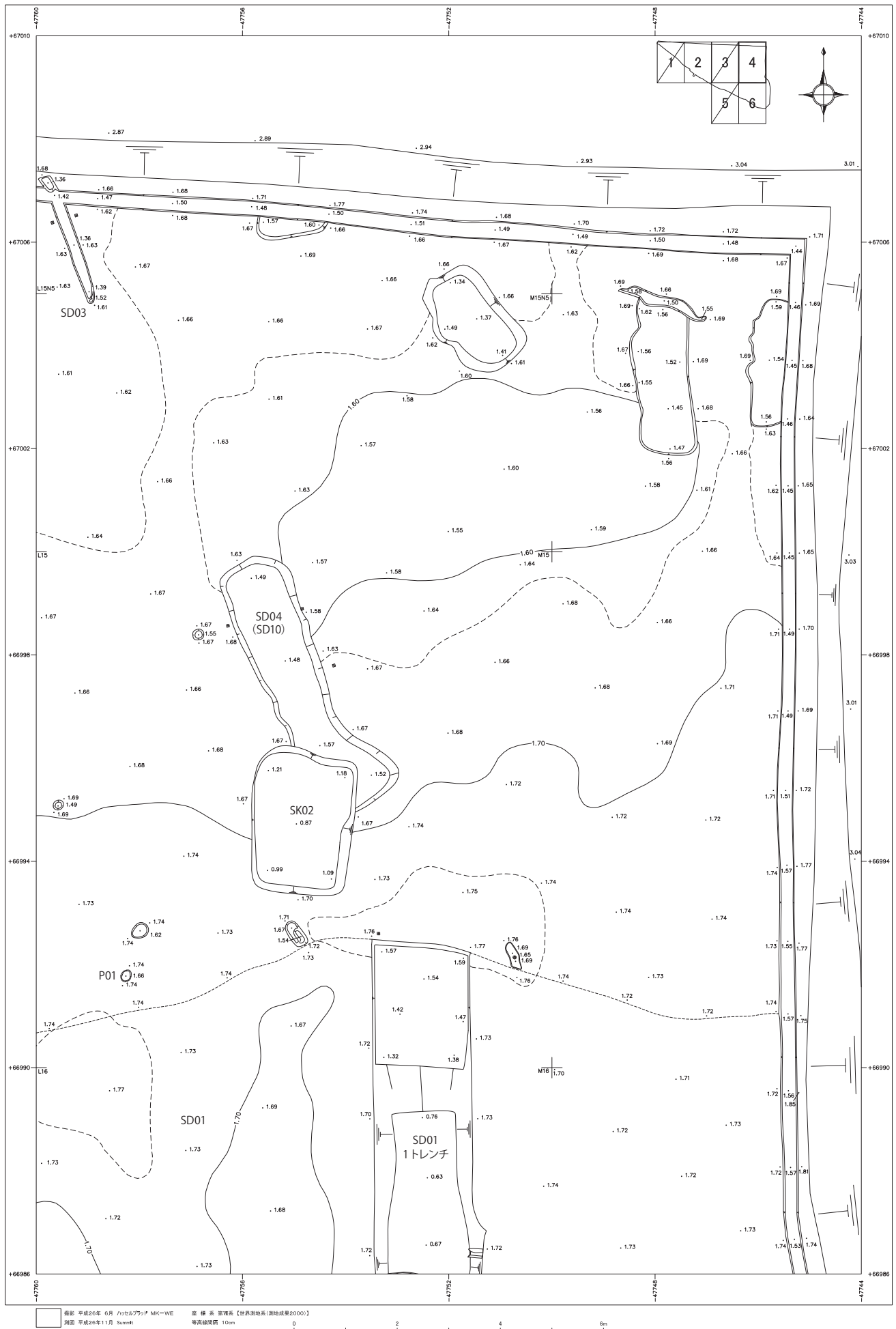
第15図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(1) (S=1/100)



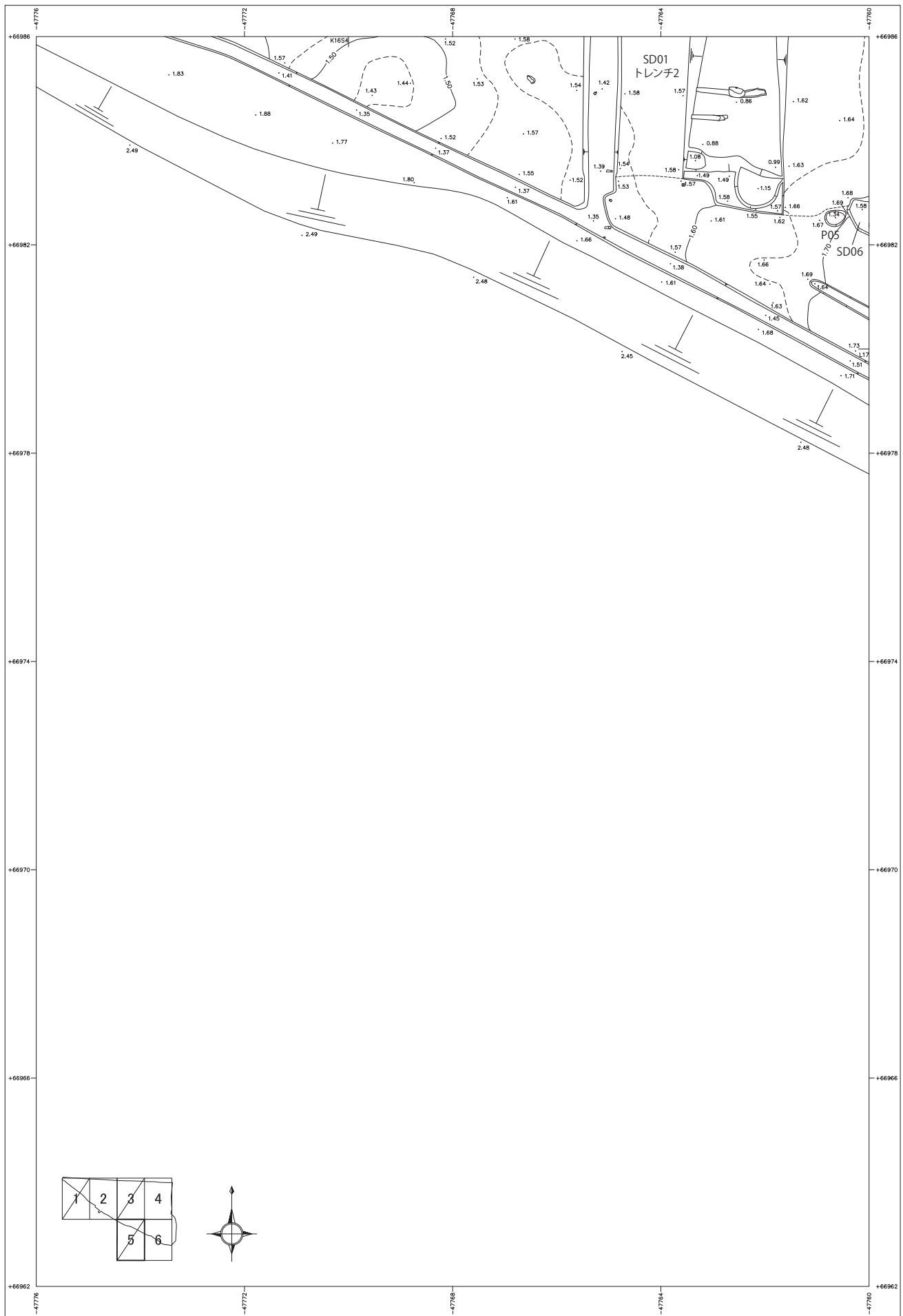
第16図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(2) (S=1/100)



第17図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(3) (S=1/100)

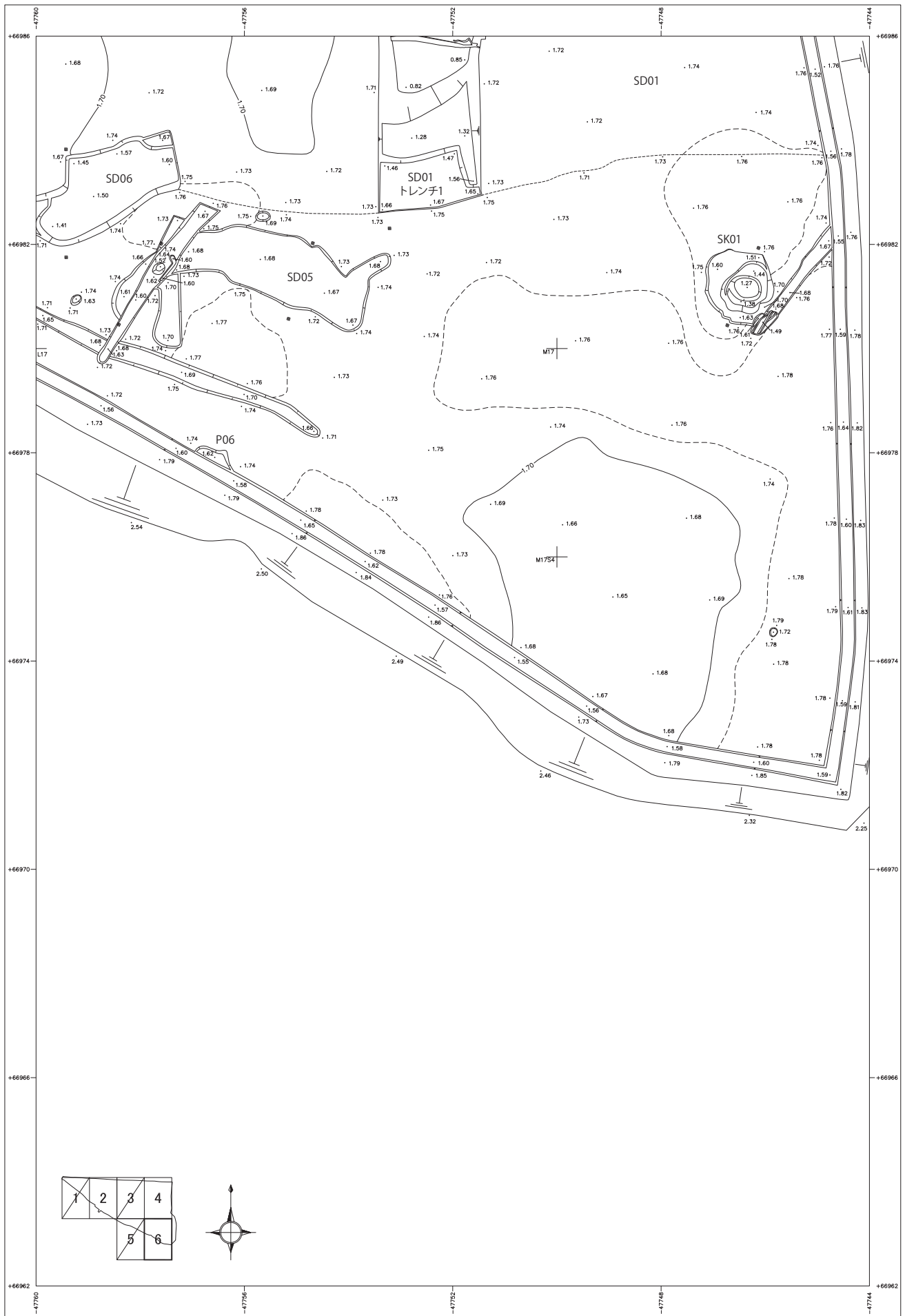


第18図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(4) (S=1/100)

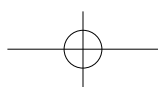
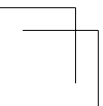
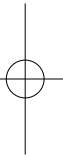
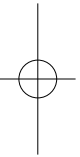
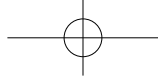
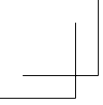


撮影 平成26年 6月 ハンディカメラ MK-WE
 測量 平成26年11月 Summit
 座標系 等緯高【世界測陸高(測地成果2000)】
 等高線間隔 1.00m

第19図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(5) (S=1/100)



第20図 直江ボンノシロ遺跡 遺跡平面図(6) (S=1/100)





調査区遠景（南から撮影 左奥は金沢港）



調査区全景（オルソ画像 他調査区含む 上が北）



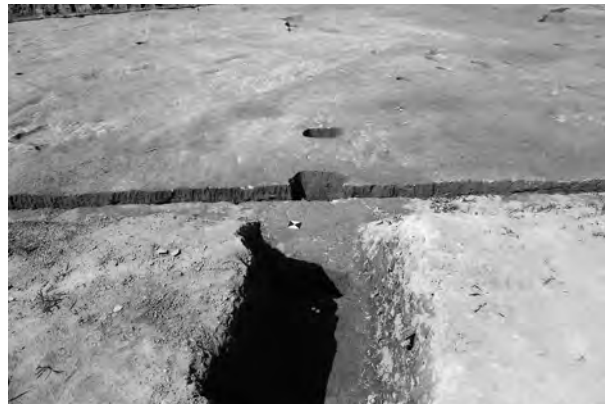
調査区全景（南東から）



作業風景（西から 左奥の公民館下がH22調査区）



SA01（北から）



SA02（北から）



SA02（P09 北から）



SA02（P10 北から）



SA02（P27 北から）



SK01（東から）



SD01・1 トレンチ (南東から)



SD01・2 トレンチ (南東から)



SD01・2 トレンチ出土漆器椀蓋



SD01・3 トレンチ (南から)



SD03 土器出土状況 (南から)



SD07 (南から)



SD07 (東から)



SD08 (東から)



SD09 (南から)



SD10 (南から)



SD10 石器出土状況 (南から)



SK03 (SD10 北から)



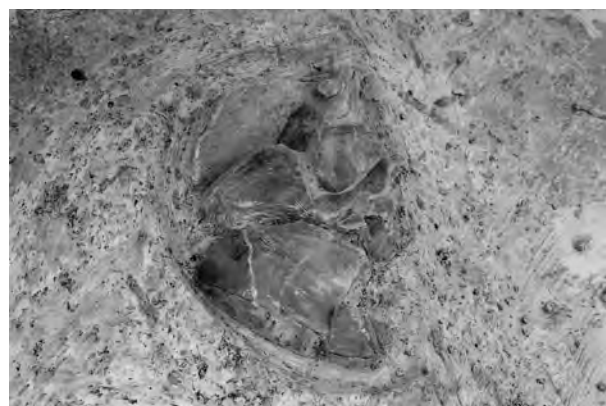
SD04 (SD10 北から)



SD04 (SD10 南から)



P02 (西から)



P08 縄文土器出土状況 (北から)



SD01出土 第8图-21



SD03出土 第9图-13



SD07出土 第9图-18



SD08出土 第10图-22



SD08出土



SD08出土 第11图-8



SD08出土 第12图-5



SD10 (SK03) 出土 第12图-12



SD10出土 第13図-4



SD08・包含層玉製品 第13図-17・19・18(左から)



SD08出土石製品 第13図-22~24(左から)



SD10(SK03)出土 第13図-20



SD10出土 第13図-21



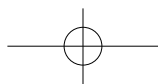
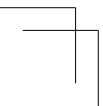
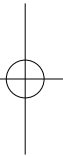
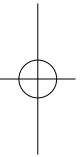
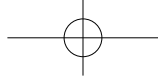
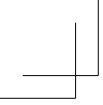
P02出土柱根 第14図-2



SD01出土漆器碗蓋 第14図-19



SD01出土木簡表・裏 第14図-13



ふりがな	いしかわけんかなざわし なおえぼんのしろいせき さん							
書名	石川県金沢市 直江ボンノシロ遺跡Ⅲ							
副書名	-金沢市立鞍月小学校体育館建設・地下貯留施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	308							
編著者名	新出敬子							
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-0374 金沢市上安原南60番地							
発行年月日	西暦2017年3月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査	調査原
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		面積	因
なおえ 直江 ぼんのしろ ボンノシロ いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 ふくとしんほくぶなおえ 副都心北部直江 とちかくせいり 土地区画整理 じぎょう92がいく1ばん 事業92街区1番	172014	県 144100 市 441	36° 36' 09"	136° 37' 58"	20140519 ～ 0702	1,188 ㎡	体育館 建設、 地下貯 留施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
直江ボンノ シロ遺跡	集落	弥生末～ 古墳初頭 近世～ 近代	土坑、周溝、柵列 溝、柵列	土器、石器 陶磁器、土器、木製品、漆器				
要 約								
直江ボンノシロ遺跡は、副都心北部直江土地区画整理事業に伴い平成21年度～22年度に発掘調査を行っており、今回の発掘調査は平成22年度調査区に隣接する場所を調査している。調査では弥生時代末～古墳時代初頭にかけての川跡や周溝等を確認した。また、平成22年度調査同様、地山に縄文時代晩期の土器が混入した状態でみつまっていることから、周囲に縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。その他、近世から近代にかけての幅約10mの流路も確認された。								

石川県金沢市
直江ボンノシロ遺跡Ⅲ
-金沢市立鞍月小学校体育館建設・地下貯留施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-
(金沢市文化財紀要308)
平成29年(2017) 3月28日発行
発行 金 沢 市
編集 金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374
石川県金沢市上安原南60番地
Tel (076)269-2451
印刷 カンダ印刷株式会社